ONKYO®

デジタルシアターシステム

CB-HT1200

取扱説明書

はじめに 4

設置する 16

接続をする 20

入力表示/
自動スピーカー設定 28

再生する 33

設定をする 39

スピーカーを増設する 51

その他 59

※マイコンのリセットについては、59ページをご覧ください。

お買い上げいただきまして、ありがとうございます。
ご使用前にこの「取扱説明書」をよくお読みいただき、正しくお使いください。
お読みになったあとは、いつでも見られる所に保証書、オンキヨーご相談窓口・修理窓口のご案内とともに大切に保管してください。

目次

はじめに

主な特長 4
安全上のご注意（必ずお読みください。） 6
箱を開けたら、まず 10
箱の中身を確認する 10
リモコンの乾電池の入れかたと交換のしかた/リモコンの使いかた 11
各部の名前と働き 12
本体前面、前面パネル部 12
表示部 13
後面パネル部 14
リモコン（RC-678S） 15

設置する

ラックを設置する 16
安全上のご注意 16
テレビ、外部機器を設置する 18

接続をする

HDMI端子を使ってテレビやAV機器を接続する 20
接続のしかた 20
AV機器やゲーム機を接続する 22
デジタル音声機器の接続をする 22
アナログ音声機器の接続をする 23
システム機能について 24
オンキヨー製品との連動について 24
電源を入れる 27
電源コードを接続する/電源を入れる 27

入力表示/自動スピーカー設定

入力表示について 28
入力表示を切り換える 28
自動スピーカー設定について 29
自動スピーカー設定をする（Audyssey（オーディシー） 2EQ（ツーイーキュー）機能） 29
測定のしかた 29

目次

再生する

機器を選んで再生する 33
リスニングモードを楽しむ 35
一時的に音量を小さくする 36
表示部の明るさを変える 36
スリープタイマーを使う 36
表示を確認する 37
レイトナイト機能を使う 38
一時的に各スピーカーレベルを調整する 38

設定をする

設定をする 39
設定をする 39
● テレビ画面に表示する 39
● 操作のしかた 39
● スピーカー環境の設定（1. Sp Config）......41
● 視聴位置からスピーカーまでの距離設定（2. Sp Distance）......42
● スピーカーの音量レベル調整（3. Level Cal）......43
● 音響効果を調整する（4. Audio Adjust）......44
● ソースの設定をする（5. Source Setup）......47
● ボリューム設定をする（6. Volume Setup）......47
● HDMI設定をする（7. HDMI Setup）......48
● CB-HT1200の電源を自動的にスタンバイ状態にする（8. AutoPowerDown）......49
デジタル入力モードをDTS、PCMに固定する 50

スピーカーを増設する

スピーカーを増設する 51
ホームシアターを楽しもう 51
複数のスピーカーを使った接続をする 52
アンプ内蔵サブウーファーを接続する 53
入力ソースの種類と対応するリスニングモード 54
● シアターディメンショナル（Theater-Dimensional）のFront 5.1chモードを使う 57

その他

取り扱い上のご注意 58
困ったときは 59
マイコンのリセットについて 59
HDMIについて 64
用語集 65
● 音声フォーマット 65
● 音声 66
主な仕様 67
修理について 69
RIHDと互換性のあるテレビやプレーヤー /レコーダーをご使用になるには 70

主な特長

AVセンター部

■ オーディオリターンチャンネル/3D映像対応「HDMI ver.1.4」端子搭載

■ 対応メーカーのハイビジョンTVとシステム連動、HDMI端子を活用した「RIHD」機能搭載

■ ブルーレイディスクのHDサラウンドに対応。
「Dolby*1 TrueHD」、「DTS*2-HD Master Audio」デコーダー搭載

■ デジタルテレビ放送に対応するAAC*3デコーダー搭載

■ グランド電位の安定化技術、特許技術回路「VLSC*4」など培われた音質技術を投入

■ リスニングアングルの調整も可能な高品位バーチャルサラウンド機能「Theater-Dimensional*5」搭載

■ 圧縮された音楽ファイルをより良い音で楽しむMusic Optimizer*6機能搭載

■ オートスピーカーセットアップ「Audyssey 2EQ®*7」搭載

■ 小音量時にサラウンド効果を高める「Audyssey Dynamic EQ」搭載

■ 音量の大小を即時に調整するAudyssey Dynamic Volume機能搭載

■ テレビ画面で設定可能なオーバーレイOSDを採用

■ アンプ内蔵サブウーファーが接続できるサブウーファープリアウト端子装備

■ さまざまな機器と接続できる豊富な入力端子
（HDMI*8 3系統、光デジタル2系統、同軸デジタル1系統、LINE入力2系統）

■ オプションのiPodドックも操作できるシステムリモコン付属

サブウーファー部

■ 高品位な低音増強を可能にするバスレフ技術「AERO ACOUSTIC DRIVE」を搭載

■ 13cmユニットを2基搭載した量感溢れる重低音再生

フロントスピーカー部

■ ウーファー振動板には、力強さと小口径8cmユニットの緻密さを併せ持つ再現性豊かなA-OMFコーンを採用

■ ツィーター振動板にバランスドーム型を採用

キャビネット部

■ 天面に黒フィルム強化ガラスを採用

*[1] ドルビーラボラトリーズからの実施権に基づき製造されています。
“Dolby”、“ドルビー”、“Pro Logic”およびダブルD記号は、ドルビーラボラトリーズの商標です。
*[2] 米国特許： 5,451,942; 5,956,674; 5,974,380; 5,978,762; 6,226,616; 6,487,535; 7,212,872; 7,333,929; 7,392,195; 7,272,567およびその他の国における特許（出願中含む）に基づき製造されています。
DTS、DTS-HD、および記号はDTS社の登録商標です。また、DTS-HDMaster AudioおよびDTSロゴはDTS社の商標です。製品にはソフトウェアを含みます。
© DTS, Inc. All Rights Reserved.
*[3] AACロゴは、ドルビーラボラトリーズの商標です。
*[4] VLSCは、オンキヨー株式会社の登録商標です。
*[5] Theater-Dimensionalは、オンキヨー株式会社の商標です。
*[6] Music Optimizerは、オンキヨー株式会社の商標です。
*[7] Audyssey Laboratories™からの実施権に基づき製造されています。米国および他の国々の特許申請中。Audyssey 2EQ®、Audyssey Dynamic Volume®およびAudyssey Dynamic EQ®はAudyssey Laboratoriesの登録商標です。
*[8] HDMI、HDMIロゴおよびHigh-Definition Multimedia Interfaceは、米国および他の国々におけるHDMI Licensing LLCの商標または登録商標です。
＊x.v.Colorは、ソニー株式会社の商標です。
＊iPodは、米国およびその他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。

安全上のご注意
安全にお使いいただくため、ご使用の前に必ずお読みください。

電気製品は、誤った使いかたをすると大変危険です。
あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、「安全上のご注意」を必ずお守りください。

「警告」と「注意」の見かた
間違った使いかたをしたときに生じることが想定される危険度や損害の程度によって、「警告」と「注意」に区分して説明しています。

誤った使いかたをすると、火災・感電などにより死亡、または重傷を負う可能性が想定される内容です。

誤った使いかたをすると、けがをしたり周辺の家財に損害を与える可能性が想定される内容です。

絵表示の見かた
△記号は「ご注意ください」という内容を表しています。

高温注意

感電注意

⦸記号は「～してはいけない」という禁止の内容を表しています。

分解禁止

ぬれ手禁止

●記号は「必ずしてください」という強制内容を表しています。

電源プラグをコンセントから抜く

必ずする

⚠ 警告

故障したまま使用しない、異常が起きたらすぐに電源プラグを抜く

電源プラグをコンセントから抜く

- 煙が出ている、変なにおいや音がする
- 本機内部に水や金属が入ってしまった
- ラックが変形したり破損した
- 音が出なくなった

このような異常状態のまま使用すると、火災・感電の原因となります。すぐに電源プラグをコンセントから抜いて販売店に修理・点検を依頼してください。

分解、改造しない

分解禁止

火災・感電の原因となります。
内部の点検・整備・修理は販売店に依頼してください。

接続、設置に関するご注意

■ 通風孔をふさがない、放熱を妨げない

禁止

アンプ部の温度上昇を防ぐため、キャビネットの背面に通風孔があけてあります。通風孔をふさぐと内部に熱がこもり、火災ややけどの原因となることがあります。

- 通気性の悪い狭い所に設置して使用しない、押入れなどに押し込んで使用しない
  (ラック背面から10cm以上のスペースをあける)
- 逆さまや横倒しにして使用しない
- 布やテーブルクロスをかけない
- じゅうたんやふとんの上に置いて使用しない

■ ラックに収納する機器の放熱を妨げない

禁止

通風孔が完全にふさがれてしまうようなサイズの製品をラック内に置かないでください。通風孔をふさぐと内部に熱がこもり、火災の原因となります。

⚠ 警告

接続、設置に関するご注意

■ 壁コンセントから電源プラグを抜き差ししやすい場所に設置する

必ずする

異常が起きたり故障した場合など、すぐに電源プラグを抜けるようにしてください。

■ 水蒸気や水のかかる所に置かない、本機の上に液体の入った容器を置かない

水場での使用禁止

水濡れ禁止

本機に水滴や液体、ペットの体毛や尿が入った場合、火災・感電の原因となります。

- 湿度の高い場所では使用しない
- 調理台や加湿器のそばには置かない
- 雨や雪などがかかるところで使用しない
- 本製品の上に花びん、コップ、化粧品、ろうそくなどを置かない
- ほこりの多い場所に置かない

電源コード・電源プラグに関するご注意

■ 電源コードを傷つけない

禁止

- 電源コードの上に重い物をのせたり、電源コードが本製品の下敷にならないようにする
- 傷つけたり、加工したりしない
- 無理にねじったり、引っ張ったりしない
- 熱器具などに近づけない、加熱しない

電源コードが傷んだら（芯線の露出・断線など）販売店に交換をご依頼ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

■ 電源プラグは定期的に掃除する

必ずする

電源プラグにほこりなどがたまっていると、火災の原因となります。電源プラグを抜いて、乾いた布でほこりを取り除いてください。

使用上のご注意

■ 本機内部に金属、燃えやすいものなど異物を入れない

禁止

火災・感電の原因となります。特に小さなお子様のいるご家庭ではご注意ください。

- 本機の通風孔、ダクトから異物を入れない
- 本機の上に通風孔に入りそうな小さな金属物を置かない

■ 長時間音がひずんだ状態で使わない

禁止

アンプ、スピーカーなどが発熱し、火災の原因となることがあります。

■ 雷が鳴りだしたら本機、接続機器、接続コード、電源プラグに触れない

接触禁止

感電の原因となります。

■ 長期間大きな音で使用しない

禁止

本機をご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大音量で長期間続けて使用すると、聴力が大きく損なわれる恐れがあります。

電池に関するご注意

■ 乾電池を充電しない、加熱・分解しない、火や水の中に入れない

禁止

電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

- 指定以外の電池は使用しない
- 新しい電池と古い電池を混ぜて使用しない
- 電池を使い切ったときや長時間リモコンを使用しないときは電池を取り出す
- コインやネックレスなどの金属物と一緒に保管しない
- 極性表示(プラス⊕とマイナス⊖の向き)に注意し、表示通りに入れる

■ 電池から漏れ出た液にはさわらない

接触禁止

万一、液が目や口に入ったり皮膚に付いた場合は、すぐにきれいな水で充分洗い流し、医師にご相談ください。

⚠ 注意

接続、設置に関するご注意

■ **不安定な場所や振動する場所には設置しない**

禁止

注意

水平で安定したところに設置してください。
強度の足りない場所や振動するところに置かないでください。テレビが落下したり倒れたりして、けがの原因となることがあります。
スピーカーを壁に取り付けるときは、壁の材質、また、桟などの位置に注意してください。（ネジの保持強度に大きな差が出ますので、販売店にご相談ください。）

■ **天板・棚板・底面には、制限以上の重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かない**

禁止

バランスがくずれて倒れたり落下して、けがの原因となることがあります。また、本機やテレビにぶら下がったり、上に乗ったり、踏み台代わりにしないでください。

■ **テレビは転倒・落下防止の処置をする**

必ずする

地震の際や、お子様がよじ登ったりぶら下がったり、もたれかかったりすると、転倒や落下の原因となります。
テレビの説明書と本機の取扱説明書をよくご覧になり、転倒防止ベルトや丈夫なひもなどでテレビとラックを固定してください。

■ **ガラスに傷をつけたり、衝撃を与えない**

禁止

鋭利なものや尖ったものなどで、傷をつけないでください。
本機に付属のガラス板は強化ガラスですが、傷が入った状態で長時間ご使用になると傷が進行して自然に破損することがあります。傷が入った場合は、お買い上げの販売店にご相談の上、新しいガラスと交換してください。

■ **天板に加熱した鍋ややかんなど、熱いものを置かない**

禁止

ガラス面が割れて、故障やけがの原因となります。

■ **開梱・設置について**

必ずする

本機は非常に重いので、梱包箱から出したり設置するときは必ず2人以上で行ってください。
部品と部品の間に手や指をはさんで傷つけることがありますのでご注意ください。

■ **配線コードに気をつける**

注意

配線された位置によっては、つまずいたり引っかかったりして、落下や転倒など事故の原因となることがあります。

電源コード・電源プラグに関するご注意

■ **表示された電源電圧（交流100ボルト）で使用する**

必ずする

本機を使用できるのは日本国内のみです。
表示された電源電圧以外で使用すると、火災·感電の原因となります。

■ **電源コードを束ねた状態で使用しない**

禁止

発熱し、火災の原因となることがあります。

■ **電源プラグを抜くときは、電源コードを引っ張らない**

禁止

コードが傷つき、火災や感電の原因となることがあります。
プラグを持って抜いてください。

■ **長期間使用しないときは電源プラグをコンセントから抜く**

電源プラグをコンセントから抜く

絶縁劣化やろう電などにより、火災の原因となることがあります。
リモコンや本体の電源ボタンで画面を消しただけでは、本機はまだ通電している状態です。完全に電源を切るには、電源プラグをコンセントから抜いてください。

■ **電源プラグは、コンセントに根元まで確実に差し込む**

必ずする

差し込みが不完全のまま使用すると、感電、発熱による火災の原因となります。
プラグが簡単に抜けてしまうようなコンセントは使用しないでください。

⚠ 注意

■ ぬれた手で電源プラグを抜き差ししない

ぬれ手禁止

感電の原因となることがあります。

■ お手入れの際は電源プラグを抜く

電源プラグを
コンセント
から抜く

お手入れの際は、安全のため電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

使用上のご注意

■ 通風孔の温度上昇に注意

高温注意

本機の通風孔付近は放熱のため高温になることがあります。電源が入っているときや、電源を切った後しばらくは通風孔付近にご注意ください。

■ 音量に注意する

禁止

- 突然大きな音が出てスピーカーを破損したり、聴力障害などの原因となることがあります。
- 始めから音量を上げ過ぎると、突然大きな音が出て耳を傷めることがあります。音量は少しずつ上げてご使用ください。

■ キャッシュカード、フロッピーディスクなど、磁気を利用した製品を本機の上に置かない

禁止

磁気の影響でキャッシュカードやフロッピーディスクが使えなくなったり、データが消失することがあります。

移動時のご注意

■ 移動時は電源プラグや接続コードをはずす

電源プラグを
コンセント
から抜く

コードが傷つき火災や感電の原因となります。

■ 本機の上にものを乗せたまま移動しない

禁止

本機の上に他の機器を乗せたまま移動しないでください。落下や転倒してけがの原因となります。

■ 移動させる場合は、ゆっくり動かす

必ずする

段差があるときは、落下や転倒してけがの原因となりますので、持ち上げて移動させてください。グリルネット部を持って移動させないでください。また、底板と床の間に足先を挟まないようにご注意ください。

■ 機器内部の点検について

お客様のご使用状況によって、定期的に機器内部の掃除をおすすめします。
本製品の内部にほこりがたまったまま使用していると火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うと、より効果的です。内部清掃については、販売店にご相談ください。

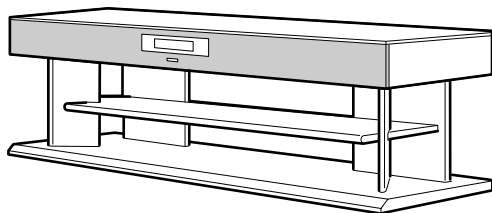
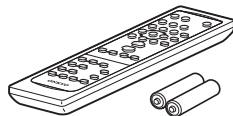
■ 本製品のお手入れについて

- 表面の汚れは、中性洗剤をうすめた液に布を浸し、固く絞って拭き取ったあと乾いた布で拭いてください。化学ぞうきんなどをお使いになる場合は、それに添付の注意書きなどに従ってください。
- シンナー、アルコールやスプレー式殺虫剤を本製品にかけないでください。塗装が落ちたり変形することがあります。

箱を開けたら、まず

箱の中身を確認する

ご使用の前に次のものがそろっていることをお確かめください。(　)内の数字は数量を表しています。

●本体（1）

●リモコン（RC-678S）（1）
●乾電池（単3形）（2）

●測定用マイク（1）

●電源コード（1）

●オーディオ用光デジタルケーブル 1.5m（1）

●ネジ（大)(1）
（テレビ転倒防止用）

●木ネジ（2）
（テレビ転倒防止用）

●取扱説明書（本書)(1） ●クイックセットアップガイド（1）
●オンキヨーご相談窓口・修理窓口のご案内（1） ●保証書（1） ●ユーザー登録カード（1）

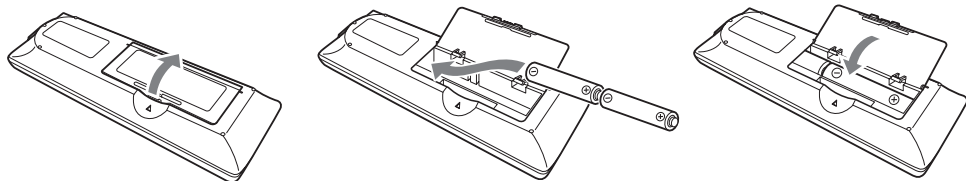
音のエチケット

楽しい映画や音楽も、時間と場所によっては気になるものです。
隣近所への配慮を十分しましょう。特に静かな夜間には窓を閉めるのも
一つの方法です。お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

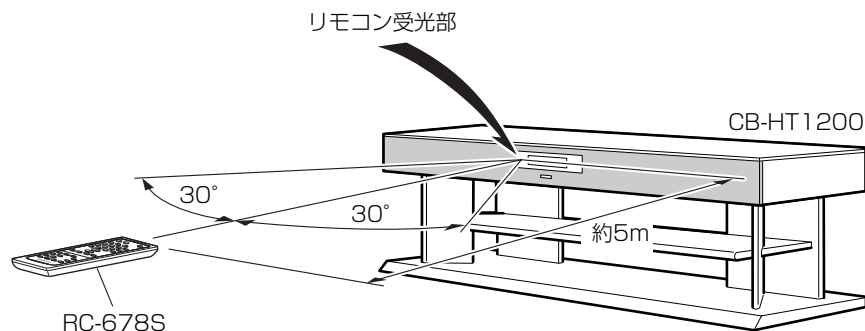
リモコンの乾電池の入れかたと交換のしかた

① カバーを矢印の方向に持ち上げる。

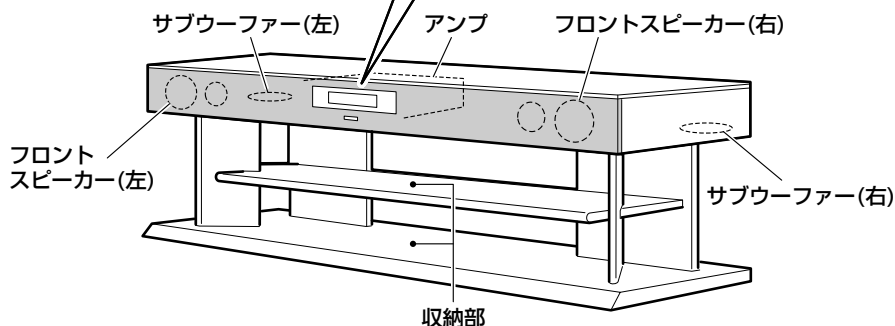
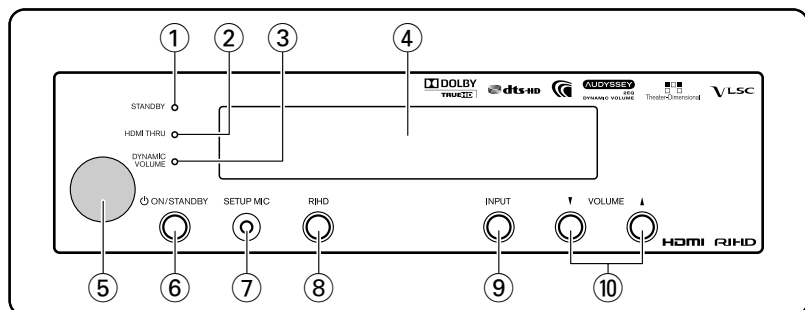
② 中の極性表示にしたがって、付属の電池2個をプラス⊕、マイナス⊖を間違えないように入れる。

③ カバーを戻す。

リモコン操作の反応が悪くなったら、2本とも新しい乾電池（単3形）と交換してください。

- 電池の極性（⊕、⊖）は、表示通り正しく入れてください。
- 種類の異なる電池の使用や、新しい電池と古い電池の混用は避けてください。
- 長期間リモコンを使用しないときは、電池の液もれを防ぐため、電池を取り出しておいてください。

リモコンの使いかた

リモコンをラック前面のリモコン受光部に向けて操作してください。

- リモコン受光部に直射日光やインバーター蛍光灯などの強い光を当てないでください。
- 赤外線を発射する機器の近くで使用したり、他のリモコンを併用すると誤動作の原因となります。
- リモコンとリモコン受光部の間に障害物があると、操作できません。
- リモコンの上に本などの物を置かないでください。ボタンが押し続けられた状態になり、電池が消耗してしまうことがあります。

本体前面、前面パネル部

① **STANDBYインジケーター**
スタンバイ状態のときや、リモコン信号を受信すると点灯します。

② **HDMI THRUインジケーター**
HDMI THRU機能（☞49ページ）が働いているときに点灯します。

③ **DYNAMIC VOLUMEインジケーター**
ダイナミックボリューム機能（☞46ページ）が働いているときに点灯します。

④ **表示部**
次ページをご覧ください。

⑤ **リモコン受光部**
リモコンからの信号を受信します。

⑥ **ON/STANDBYボタン**
電源のオン/スタンバイを切り換えます。

⑦ **SETUP MIC端子**
Audyssey 2EQ機能（☞29ページ）を使ってスピーカー設定をするときにのみ使用します。付属の測定用マイクを接続して、スピーカーの数や位置を検知します。付属のマイク以外のものは接続しないでください。

⑧ **RIHDボタン**
HDMIコントロール機能（☞48ページ）のオン/オフを切り換えます。

⑨ **INPUTボタン**
入力を切り換えます。

⑩ **VOLUME▲/▼ボタン**
音量を調整します。

表示部

AUDYSSEY（オーディシー）表示
自動スピーカー測定中に点滅し、測定後は点灯します。

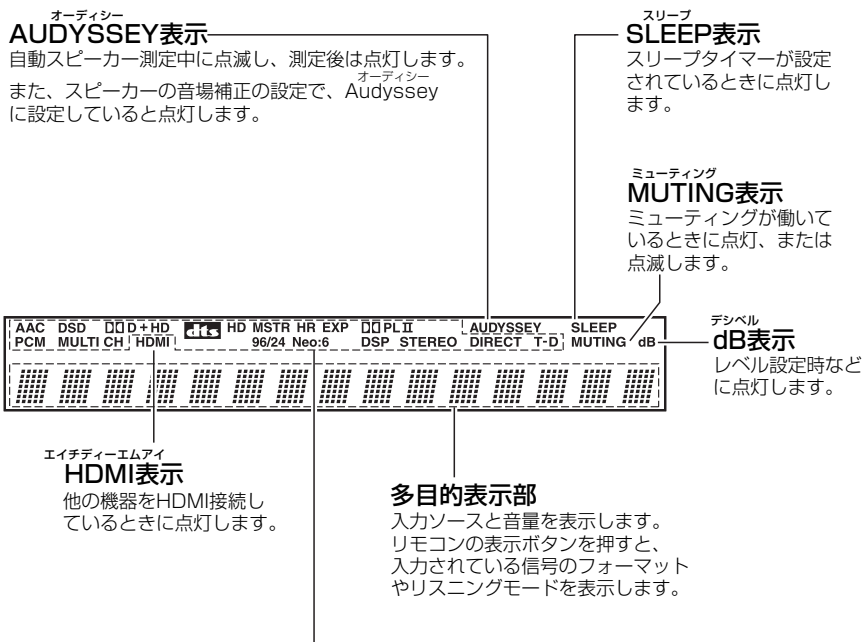
また、スピーカーの音場補正の設定で、Audyssey（オーディシー）に設定していると点灯します。

SLEEP（スリープ）表示
スリープタイマーが設定されているときに点灯します。

MUTING（ミューティング）表示
ミューティングが働いているときに点灯、または点滅します。

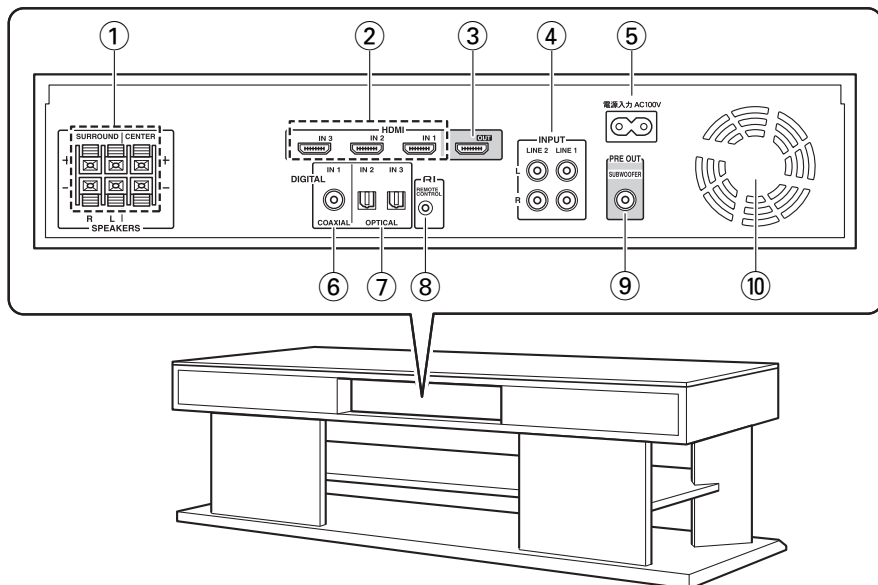
dB（デシベル）表示
レベル設定時などに点灯します。

HDMI（エイチディーエムアイ）表示
他の機器をHDMI接続しているときに点灯します。

多目的表示部
入力ソースと音量を表示します。
リモコンの表示ボタンを押すと、入力されている信号のフォーマットやリスニングモードを表示します。

デジタル入力信号フォーマット/リスニングモード表示
入力されているデジタル信号の種類およびリスニングモードを表示します。

入力信号表示

表示	入力信号
PCM	PCM
DD D	Dolby Digital
dts	DTS
AAC	AAC
DD D+	Dolby Digital Plus
DD HD	Dolby TrueHD
dts EXP	DTS Express Audio
dts HD HR	DTS-HD High Resolution Audio
dts HD MSTR	DTS-HD Master Audio
DSD	Direct Stream Digital

後面パネル部

①SPEAKERS端子（CENTER/SURROUND）
センタースピーカー、左右サラウンドスピーカーを接続する端子です。

②HDMI IN 1/2/3端子
接続した機器からデジタル映像信号とデジタル音声信号を入力する端子です。市販のHDMIケーブルを使用して接続します。

③HDMI OUT端子
本機からデジタル音声/映像信号を出力する端子です。

④LINE 1/2 INPUT端子
オーディオ用ピンコードでビデオデッキなどのライン出力（アナログ）端子と接続します。

⑤電源入力AC100V端子
付属の電源コードを接続します。

⑥DIGITAL IN1（COAXIAL）端子
デジタル音声の入力端子です。市販の同軸デジタルケーブルを使用して、デジタル再生機器を接続します。

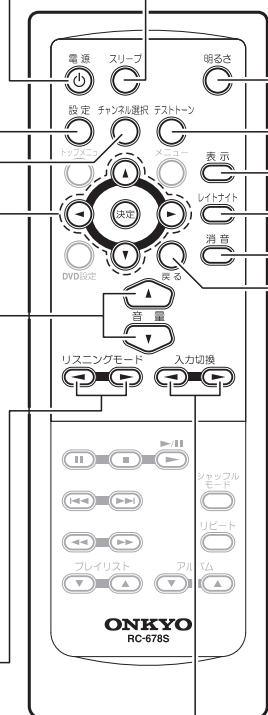
⑦DIGITAL IN2/3（OPTICAL）端子
デジタル音声の入力端子です。市販のオーディオ用光デジタルケーブルを使用して、デジタル再生機器を接続します。

⑧RI REMOTE CONTROL端子
RI端子付きのオンキヨー製品と接続し連動させるための端子です。RIケーブルの接続だけではシステムとして働きません。オーディオ用ピンコードも正しく接続してください。

⑨PRE OUT(SUBWOOFER)端子
アンプ内蔵のサブウーファーを接続します。

⑩放熱用ファン
本体内部の熱を逃がすためのファンです。

リモコン(RC-678S)

● CB-HT1200を操作するときのボタン

ラックを設置する

ラックを設置する前に、下記の注意事項をよくお読みください。

⚠ 安全上のご注意

■設置をするときのご注意

- 箱から取り出す時は、グリルネットを強く押さないでください。故障の原因となることがあります。
- 本機を設置する際には、指などを挟まないよう十分にご注意ください。また、手袋を着用して作業を行ってください。
- 本機は非常に重いので、設置は必ず2人以上で行ってください。けがや腰痛の原因となることがあります。

■強化ガラスの取り扱いについてのご注意

天板ガラスは強化処理され、飛散防止フィルムを施してありますが、使い方を誤ると割れるおそれがあります。ガラスが割れると破片が飛び散り、けがの原因になります。以下の注意事項をお守りください。

- ガラスに物をぶつけるなど、強い衝撃を与えない
- 鋭利な物でガラス面を突いたりしない
- 強化ガラスに傷がつくと突然割れることがあります。傷がついたときは速やかにお取り替えください。

■設置をするときのご注意

- 傾いたところや不安定な場所に置かないでください。
- 調理台や加湿器のそばなど油煙や湯気があたるような場所には置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。
- 本機は非常に重くなっていますので、動かすときはゆっくりと慎重に行ってください。
  無理に引きずって移動させようとすると、床を傷つけてしまうおそれがありますのでご注意ください。

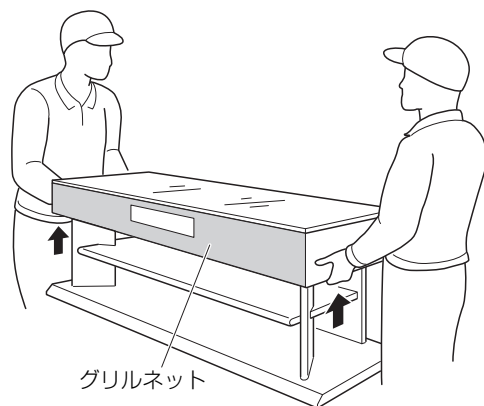
■使用するときのご注意

- 本機の上に乗ったり座ったり、踏み台にしないでください。特にお子様にはご注意ください。また、上面には70kg、中段には10kg、下面には20kgを超えるものを載せないでください（合計100kgまで）。破損や故障の原因となります。

テレビ、外部機器を設置する

- **ブラウン管テレビは置かないでください。**
- ラックに内蔵しているスピーカーには磁石が使われています。ブラウン管テレビ、時計、キャッシュカード、フロッピーディスクなど、磁気の影響を受けるものをラックの上に置かないでください。
  機器の接続は、設置したあとで行ってください。
- 設置する機器に付属の説明書などをご覧になり、通風に注意して設置してください。特に放熱が必要な機器を収納する場合は、説明書の記載に従って通気を充分確保してください。

■ 移動するときのご注意

本機を移動するときは、収納している機器をすべて取り出してください。
2人以上で下図の矢印部に手をかけ持ち上げ、ゆっくりと移動してください。

ご注意

- 持ち上げて移動する場合は、必ず2人以上で行ってください。
- グリルネットに大きな力を加えると、グリルネットが壊れることがあります。

■ テレビの設置について

- 天板には70kgを超える機器は設置しないでください。
- 設置作業は2人以上で行い、指詰めや腰をいためないようにしてください。
- 設置は不安定な場所を避け、壁際で安定した場所に設置してください。

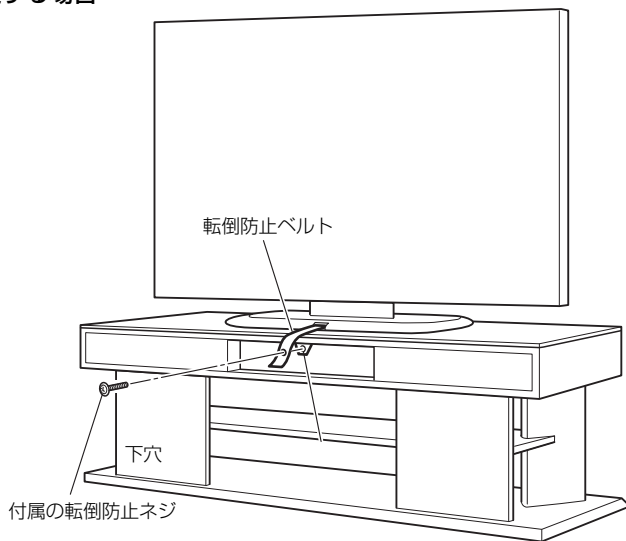
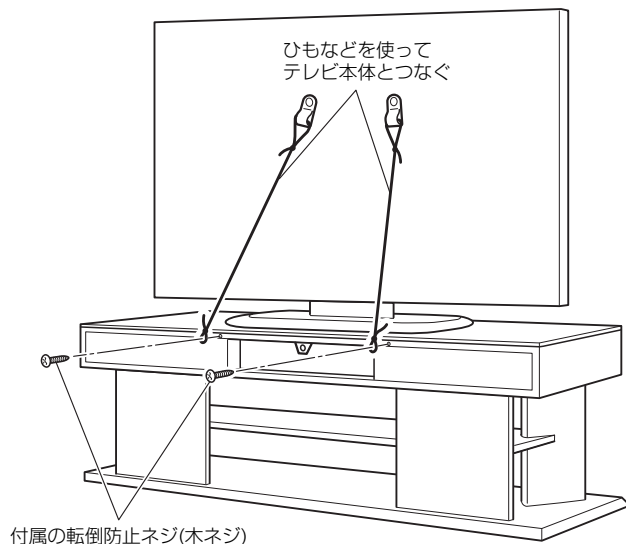
1. ご使用になるテレビを、本機の天板の中央に設置してください。
2. テレビの設置する位置を調整する際は、テレビを持ち上げて行ってください。引きずると天板を傷つけることがあります。

ご注意

テレビの底面や薄型テレビの台座が、天板よりはみ出したり、片寄った載せかたをしないようにしてください。倒れたり、破損してけがの原因となることがあります。

■ 転倒防止について

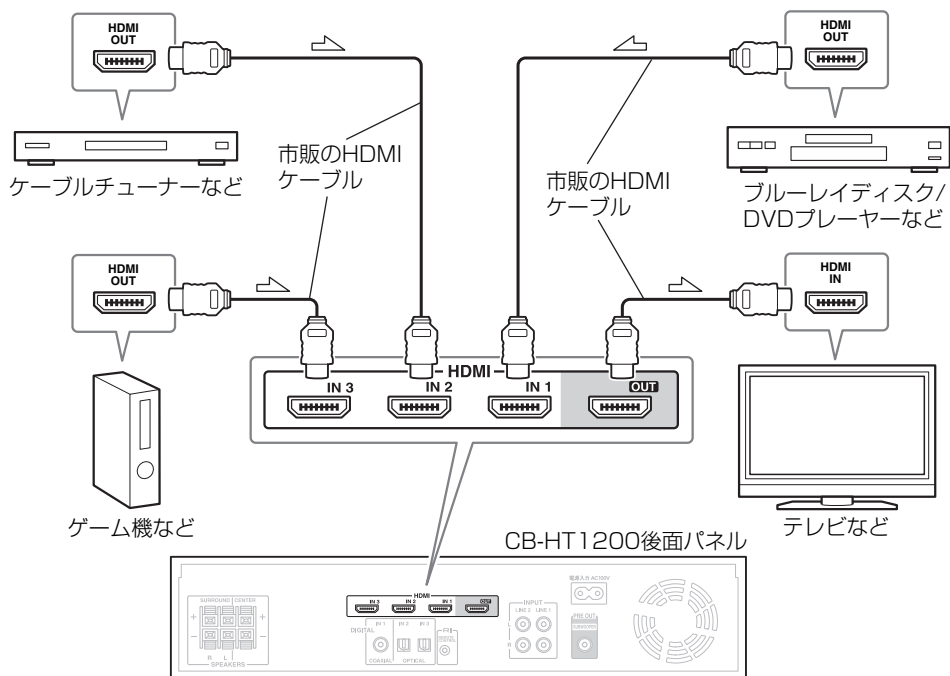
テレビの取扱説明書などもご覧になりながら、転倒防止策を行ってください。
本体背面にベルト取り付け金具が1箇所あります。この金具にテレビに付属しているベルトやじょうぶなひもなどを取り付け、付属のネジ（大）で固定してください。また、テレビを2箇所で固定する場合は、付属の木ネジ（2個）を本体背面の収納部上側に取り付け、じょうぶなひもなどを使ってテレビ本体とつないでください。

● 1箇所で固定する場合

● 2箇所で固定する場合

！ヒント

ディスプレイのゴム足などの跡が天面に残ることがあります。あらかじめご承知おきください。

HDMI端子を使ってテレビやAV機器を接続する

接続のしかた

HDMI接続では、HDMIケーブルで映像信号と音声信号を同時に伝送することができます。
市販のHDMIケーブルを使ってCB-HT1200のHDMI端子とテレビやDVD/ブルーレイレコーダー、ブルーレイディスク/DVDプレーヤーなどのHDMI端子と接続してください。

■ 映像信号の流れ

HDMI IN端子から入力したデジタル映像は、HDMI OUT端子からのみ出力されます。

■ 音声信号の流れ

HDMI IN 端子から入力したデジタル音声は、HDMI OUT端子およびCB-HT1200に接続されたスピーカーへ出力されます。

HDMI IN端子に接続した機器の音声をテレビで聞きたいときは

- TV Ctrl(コントロール)設定を「On(オン)」に設定（テレビがRIHD対応の場合）（☞49ページ）
- Audio(オーディオ) TV Out(アウト)設定を「On」に設定（テレビがRIHD対応していない場合、またはTV Ctrl設定が「Off(オフ)」の場合）（☞48ページ）
- DVDプレーヤー側の音声出力設定を「PCM」に設定

ご注意

- **HDMI機器の音声をCB-HT1200で聞く場合は、テレビにHDMI機器の映像が映る状態にしておいてください。**
  （CB-HT1200が接続されているHDMI入力をテレビ側で選んでください）HDMIは、映像機器側の認証により映るしくみになっているため、テレビの電源をオフにしていたり、テレビ側で他の入力を選んでいる状態では、CB-HT1200から音声が出なかったり、途切れるなど正常に音が出ないことがあります。
- Audio TV Out設定が「On」のとき、テレビのスピーカーから音を出しているとCB-HT1200の音量を操作したときにCB-HT1200に接続したスピーカーからも音が出ます。また、TV Ctrl設定が「On」のとき、RIHD対応テレビのスピーカーから音を出していると、CB-HT1200の音量を操作したときにテレビが消音されている間はCB-HT1200に接続したスピーカーからも音が出ます。スピーカーからの音を出さないようにするには、CB-HT1200の設定やテレビの設定を変更してください。または、CB-HT1200の音量を下げてください。

ARC（オーディオリターンチャンネル）機能について

この機能はHDMI接続したテレビからCB-HT1200のHDMI出力端子に映像音声信号を送る機能です。この機能を使用するためには、テレビがARCに対応していることが必要です。

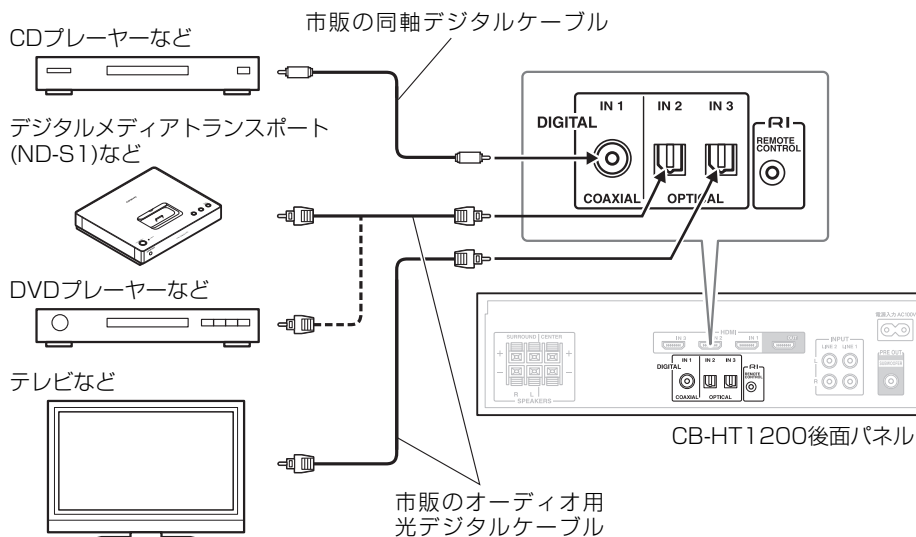
- 設定のしかたは49ページをご覧ください。

AV機器やゲーム機を接続する

- HDMIに関する接続は、20、21ページをご覧ください。
- DVDプレーヤーなどでドルビーデジタル、DTSサラウンド信号を再生するためには、DIGITAL IN（COAXIAL IN1またはOPTICAL IN2/3）端子への接続が必要です。
- パソコンでデジタルサラウンドを楽しむには、デジタル出力〔OPTICAL（光）またはCOAXIAL（同軸）〕に対応したパソコンや音源ボードが必要です。お手持ちの機器の取扱説明書もあわせてご覧ください。

すべての接続が完了してから、電源プラグをコンセントに接続してください。

デジタル音声機器の接続をする

デジタル音声機器を市販のオーディオ用光デジタルケーブルまたは同軸デジタルケーブルで接続します。接続する機器に付いている端子の形状に合ったケーブルをご使用ください。
CB-HT1200では音声接続のみです。映像接続は映像機器から直接テレビに接続してください。

！ヒント

- オーディオ用光デジタルケーブルを使用するときは、折り曲げたり、きつく巻いたりしないでください。
- 接続する機器のデジタル音声出力設定を確認してください。DVD対応のゲーム機など、機器によってはドルビーデジタル信号やDTS信号の出力設定が「オフ」になっていることがあります。
  CB-HT1200のDIGITAL IN(OPTICAL2/3)端子は、とびらタイプですので、とびらをそのまま奥へ倒すようにしてオーディオ用光デジタルケーブルを差し込んでください。
- CB-HT1200にはインテリボリューム機能があります。機器間の音量差が気になる場合にお使いください。(☞47ページ)
- CB-HT1200にはMusic Optimizer機能があります。MP3などの音楽信号（48kHz以下のPCM信号）をお聞きになるときにお使いください。(☞47ページ)

ご注意

オーディオ用光デジタルケーブルは、まっすぐ抜き差ししてください。ななめに抜き差しすると、とびらが破損する場合があります。

すべての接続が完了してから、電源プラグをコンセントに接続してください。

アナログ音声機器の接続をする

テレビやビデオデッキのアナログ音声出力端子とCB-HT1200のLINE 1/2 INPUT端子を市販のオーディオ用ピンコードで接続します。接続した機器の音声がアナログでサラウンド再生されます。

テレビなど

左（白）

右（赤）

市販のオーディオ用ピンコード

左（白）

右（赤）

INPUT

LINE 2　LINE 1

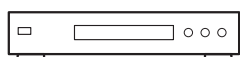
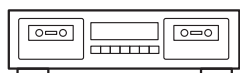
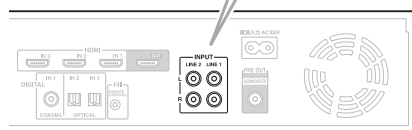
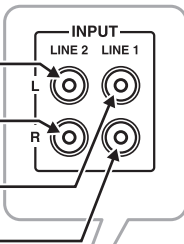
L

R

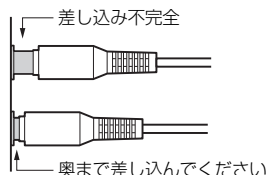
左（白）

右（赤）

音声出力端子L/Rへ

テープデッキやMDレコーダー
オンキヨー製RIドックなど

市販のオーディオ用ピンコード

CB-HT1200後面パネル

- コードのプラグはしっかりと奥まで差し込んでください。接続が不完全ですと、雑音や動作不良の原因になります。
- オーディオ用ピンコードはスピーカーコードと一緒に束ねないでください。音質が悪くなることがあります。

！ヒント

- RI機能のあるオンキヨー製品と連動させてご使用になるときは、24ページをご覧ください。
- CB-HT1200にはMusic Optimizer機能があります。MP3などの音楽信号をお聞きになるときにお使いください。（☞47ページ）

システム機能について

オンキヨー製品との連動について

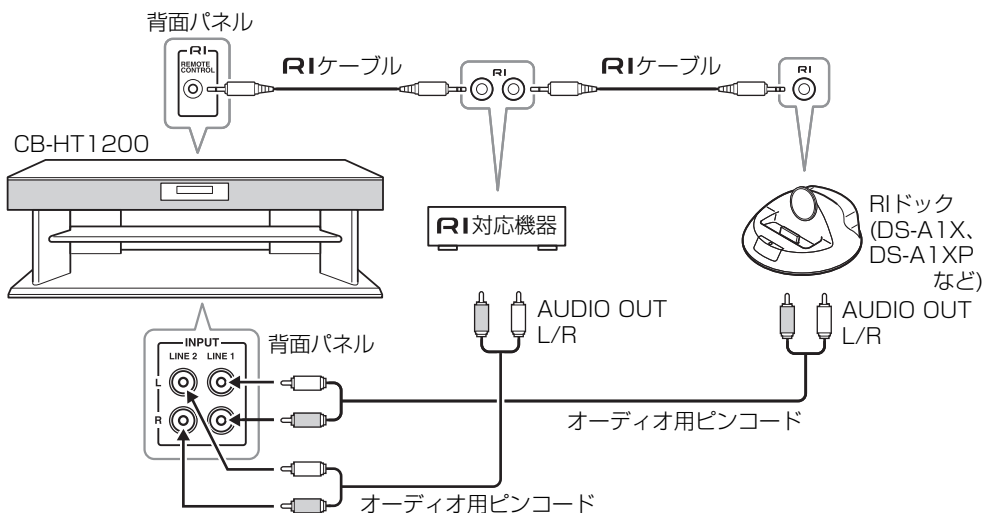
RI機能のあるオンキヨー製品を本機にRIケーブル、オーディオ用ピンコードで接続すると、次のシステム機能を使うことができます。RIケーブルとは、オンキヨーのシステム動作用ケーブルです。

オートパワーオン
CB-HT1200に接続されている機器の電源を入れたり、再生を始めると、CB-HT1200の電源が自動的に入ります。また、CB-HT1200の電源を切ると、接続されている機器全体の電源が切れます。

ダイレクトチェンジ
CB-HT1200に接続されている機器を再生すると、CB-HT1200の入力が自動的に切り換わります。

リモコン操作
CB-HT1200に付属のリモコンで各機器を操作することができます。(☞25ページ)

■ システム機能を使用するための手順

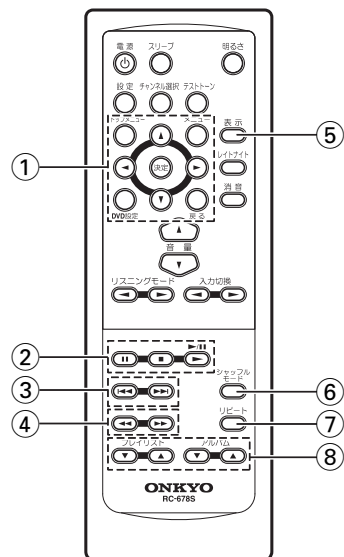
1.CB-HT1200と各機器をRIケーブルで接続します。
RIケーブルとは、オンキヨーのシステム動作用ケーブルです。(本機にはRIケーブルは付属していません。各機器に付属しているRIケーブルをご使用ください。)

- RI端子はRI端子付き製品と組み合わせてご使用ください。
- RI端子が2つある場合、2つの端子の働きは同じです。どちらにでもつなげます。
- RI端子の接続だけではシステムとして働きません。オーディオ用ピンコードも正しく接続してください。
- 接続が正しくないと各機能は働きません。上記を参照しながらオーディオ用ピンコード、RIケーブルを正しく接続してください。
- ND-S1以外の機器の場合、システム機能を使用するためにはアナログ音声接続が必要です。
- 使用できるシステム機能については、各機器の取扱説明書もあわせてご覧ください。

2.CB-HT1200の入力表示名を変更します。(☞28ページ)

システム機能について

■ リモコン操作できるオンキヨー製品

DVDプレーヤー、CDプレーヤー、MDレコーダー、CDレコーダー、カセットテープデッキ、RIドック、デジタルメディアトランスポート（ND-S1）

● 機器の接続については22、23ページを、RI接続については前ページを、入力表示については28ページをご覧ください。所定の接続や設定をしないと、下記の操作はできません。

ご注意

- 空欄はボタンを押しても動作しません。
- 第3世代iPodの場合、▶/II、⏮/⏭、◀◀/▶▶ボタンのみ働きます。
- iPodのファームウェアのバージョンアップ等により、操作できる機能の範囲や内容が変更になることがあります。
- それぞれのボタンの働きについての詳細は、各機器に付属の取扱説明書をご覧ください。
- 入力が「DVD」、「DOCK」のときは、スタンバイ時に▶（プレイ）ボタンを押すとCB-HT1200の電源が入り、接続している機器の再生が自動的に始まります。
- DVDプレーヤー、CDプレーヤー、MDレコーダー、CDレコーダー、カセットテープデッキ、RIドックを操作するためには、各機器はCB-HT1200のLINE（ライン）1または2端子とアナログ音声接続が必要です。また、接続した端子の入力表示名を機器に合わせて変更してください。（☞28ページ）
- ND-S1とRIドックの両方を接続しているときは、ND-S1を接続している入力表示名はDOCK（ドック）を選び、RIドックを接続している入力表示名はTAPE（テープ）またはMDを選んでください。表示名が異なってもシステム動作は働きます。
- リモコンはCB-HT1200のリモコン受光部に向けて操作してください。

	入力名称 リモコンのボタン名	DVD	CD/MD/CDR	DOCK	TAPE
①*1	トップメニュー	TOP MENU		iPod/PC*3	
	メニュー	MENU		MENU	
	▲/▼	▲/▼		▲/▼	
	◀/▶	◀/▶			
	決定	ENTER		SELECT	
	DVD設定	SETUPまたはDVD SETUP		SYNC/UNSYNC*3	
	戻る	RETURN			
②	II	II	II	II	PLAY◀
	▶（▶/II）	▶	▶	▶/II	PLAY▶
	■	■	■		■
③	⏮/⏭	⏮/⏭	⏮/⏭	⏮/⏭	◀◀/▶▶
④	◀◀/▶▶	◀◀/▶▶	◀◀/▶▶	◀◀/▶▶	
⑤	表示	DISPLAY*2	DISPLAY*2	BACKLIGHT*2	
⑥	シャッフルモード	PLAY MODE	ランダム	SHUFFLE	
⑦	リピート	リピート	リピート	REPEAT	
⑧	プレイリスト▲/▼			PLAYLIST▲/▼	
	アルバム▲/▼			ALBUM▲/▼	

*1 設定、チャンネル選択、テスト音の操作中は、▲/▼/◀/▶/決定/戻るボタンはCB-HT1200を操作するボタンとして働きます。このとき、トップメニュー/メニュー/DVD設定ボタンは働きません。

*2 3秒間長押しすると、記載の機能として働きます。

*3 ND-S1操作時のみ働きます。ND-S1のSYNC（シンクロ）/UNSYNC（アンシンクロ）を切り換えます。UNSYNC状態にするには、2秒以上押します。

■ iPod用RIドック/ND-S1との連動について

使用できるシステム動作については、24ページをご覧ください。

iPodのアラーム機能について

iPodのアラーム機能で再生が始まると、CB-HT1200も電源が入り、入力もRIドック/ND-S1を接続した入力に切り換わります。

ご注意

- iPodをビデオ再生する場合やiPodのアラームが音色再生のときは連動しません。
- iPodをRIドックやND-S1にセットしているときは、iPodの音量調整は効果がありません。

操作時のご注意

- 音量調整はCB-HT1200で行ってください。
- 他のiPod関連商品と接続してご使用の場合は、iPod再生検出機能が働かない場合があります。
- RIドックやND-S1にセットしているiPodの音量を調節したときは、ヘッドホンで聞く場合に事前に音量が適切かどうか確認してください。
- ND-S1に第5世代のiPod/iPod nanoをセットした場合、再生中はクリックホイールが働きませんので、再生・停止、その他の機能を使用するときは、リモコンで操作してください。

電源を入れる

電源コードを接続する

ご注意

- **付属の電源コード以外の電源コードは使用しないでください。**
  また、付属の電源コードはCB-HT1200以外の機器には使用しないでください。故障や事故の原因となります。
- 電源コードのプラグを壁の電源コンセントに接続したまま、CB-HT1200の電源入力AC100V端子から電源コードを抜いたり、つないだりすると感電する場合があります。電源コードを接続するときは、先に本体側の電源入力AC100V端子に接続し、抜くときは、最初に家庭用電源コンセントから抜いてください。

すべての接続が完了してから、電源プラグをコンセントに接続してください。
CB-HT1200の電源を入れると、瞬間的に大きな電流が流れる場合がありますのでコンピューターなど繊細な機器とは別系統のコンセントに接続することをおすすめします。

電源コードのプラグを家庭用電源コンセントに接続すると、STANDBYインジケーターが点灯し、スタンバイ状態になります。

電源を入れる

リモコンのボタンは　　　で表示しています。

1

本体前面パネルのON/STANDBYボタンまたはリモコンの電源ボタンを押す

STANDBYインジケーターが消え、表示部が点灯します。

ご注意

接続している機器がRIHDに対応している製品の場合、連動動作をさせたいときはRIHDボタンを押して「オン」に設定します。RIHDボタンを押すたびに「オン/オフ」を切り換えることができます。

「オン」に設定すると「HDMIコントロール設定」が「On」となり「ARC（オーディオリターンチャンネル）」、「パワーコントロール設定」、「TVコントロール設定」が使用できます。RIHD対応機器の連動動作について詳しくは48、49ページをご覧ください。

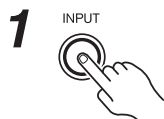
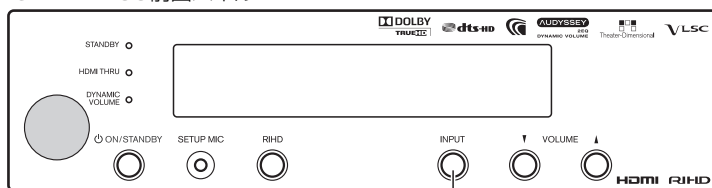
入力表示について

入力表示を切り換える

CB-HT1200と RI 端子付きオンキヨー製品を接続してシステム機能をご使用になるときは、接続した機器に合わせて入力表示を切り換えてください。

- DOCK…RIドック、ND-S1
- DVD…DVDプレーヤー
- CD…CDプレーヤー
- TAPE…カセットテープレコーダー
- MD…MDレコーダー
- CDR…CDレコーダー

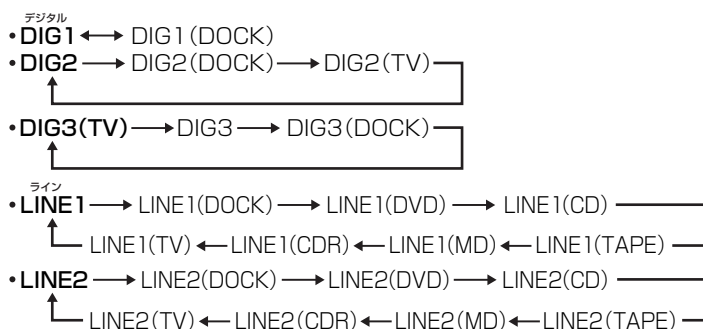
TVについて
CB-HT1200とRIHD対応テレビを接続しているときは、入力表示をTVに切り換えてください。

CB-HT1200前面パネル

1 INPUT

本体のINPUT（インプット）ボタンをくり返し押し、切り換えたい入力名称を表示させる

2 INPUT

本体のINPUTボタンを約3秒押して変更したい名称を選ぶ

INPUT（インプット）ボタンをくり返し押すたびに以下のように切り換わります。

ご注意

表示名はすべての入力に対して1つしか使用することができません。
たとえばDIG1（デジタル）の入力表示名をDIG1（DOCK（ドック））にすると、その他の入力は「DOCK」を選ぶことができなくなります。

自動スピーカー設定について

自動スピーカー設定をする（Audyssey（オーディシー） 2EQ（ツーイーキュー）機能）

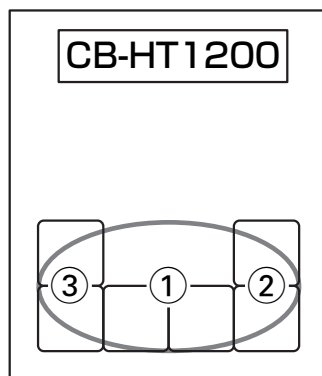
付属の測定用マイクを使って、自動的にスピーカーの数、音量レベルの調整、各スピーカーの最適なクロスオーバー周波数、および視聴位置からの距離を測定します。
また、部屋の中の様々な環境により生じる音のひずみを補正しますので、クリアでバランスのよい音になります。Audyssey（オーディシー） 2EQ（ツーイーキュー）機能を使用することで、Audyssey（オーディシー） Dynamic（ダイナミック） EQ（イーキュー）機能を利用できるようになります。Audyssey Dynamic EQの働きにより、どの音量でも適切な音のバランスを保つことができます。この機能を使用する前に、使用するすべてのスピーカーを接続してください。
Audyssey Dynamic EQ機能を働かせると、Audyssey Dynamic Volume（ボリューム）機能を利用できるようになります。

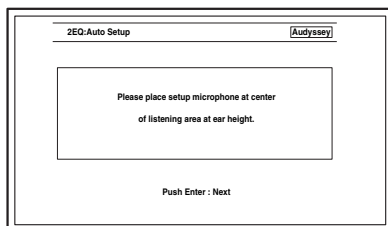
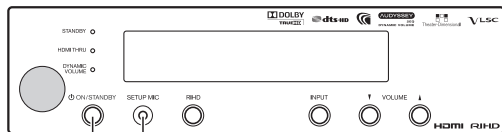
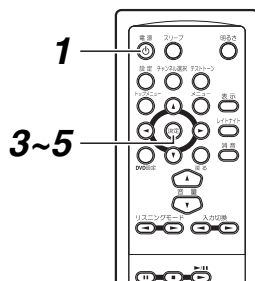
測定のしかた

測定位置は視聴エリア内の3箇所です。下図を参考に測定用マイクを置く位置をご確認ください。
具体的な操作手順については、30～32ページをご覧ください。

① 最初に測定する位置です。視聴エリアの中心、または1人で視聴するときに座る位置です。
② 2番目に測定する位置です。視聴エリアの右側にあたる位置です。
③ 3番目に測定する位置です。視聴エリアの左側にあたる位置です。
①と②、①と③の間は、1m程度またはそれ以上あけるようにしてください。
● すべての測定が終了するまで約10分程度かかります。

ご注意

サラウンドモードが「DSD（Direct（ダイレクト） Stream（ストリーム） Digital（デジタル））」になっているときは、測定できません。

テレビをHDMI接続している場合には、テレビ画面にも設定内容が表示されます。

テレビに画面が映らない場合は、テレビ側の入力切換が本機に接続したHDMI入力になっているか確認してください。

自動スピーカー設定について

リモコンのボタンは　　　で表示しています。

1

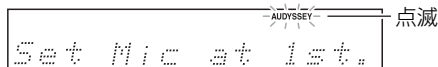
本体前面パネルのON/STANDBYボタンまたはリモコンの電源ボタンを押す

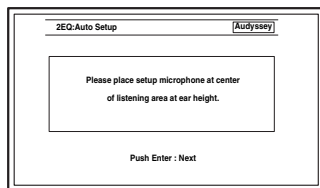
STANDBYインジケーターが消え、表示部が点灯します。

2

付属の測定用マイクを視聴位置に設置してから、マイクのプラグを本体のSETUP MIC端子に接続する

29ページの「測定のしかた」の図を参考に、①の位置にマイクを置いてください。
本体表示部に下記の表示が出ます。

AUDYSSEY ― 点滅
Set Mic at 1st.

テレビをHDMI接続している場合は、テレビ画面を見ながら設定することができます。

- OSD画面表示の「Push Enter : Next」は、リモコンの「決定ボタンを押すと次に進みます」を表します。

OSD画面表示

ご注意

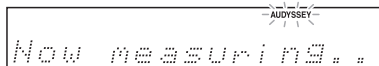
- マイクは水平に置いてください。手に持ったまま測定しないでください。
- それぞれのスピーカーからマイクの間に障害物があると、正しく測定できません。通常の視聴時と同じ環境にしてください。
- MUTING機能が設定されていると、ミューティングは解除されます。

！ヒント

視聴するときの耳に近い位置にマイクを設置すると、正確に測定できます。三脚や水平な台を使用すると高さを調節できます。

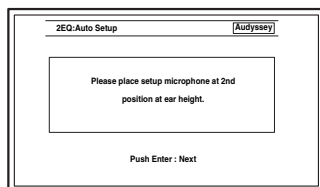
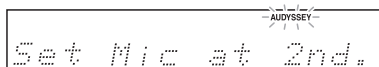
3 決定ボタンを押す

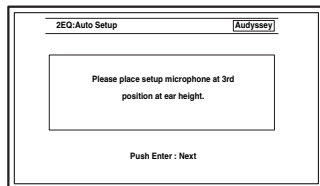
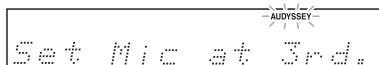
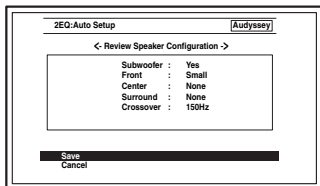
壁ぎわや部屋の隅に下がるなどして、スピーカーとマイクの間に入らないようにして、決定ボタンを押してください。自動スピーカー設定が始まります。接続したスピーカーから出るテスト音をマイクが測定します。完了するまで数分かかります。

AUDYSSEY
Now measuring..

- 測定中は部屋の中をできるだけ静かな状態にしてください。周囲に雑音があると正しく測定できないことがあります。屋外の音、室内の電気製品から出る音や人の話し声などが影響を与えることがあります。
- 測定を途中で止めるときは、マイクのプラグを抜いてください。

4 測定が終わると下記の表示が出るので、マイクを視聴エリアの右側に置き決定ボタンを押す

29ページの「測定のしかた」の図を参考に、②の位置にマイクを置いてください。完了するまで数分かかります。

AUDYSSEY
Set Mic at 2nd.

5 測定が終わると下記の表示が出るので、マイクを視聴エリアの左側に置き決定ボタンを押す

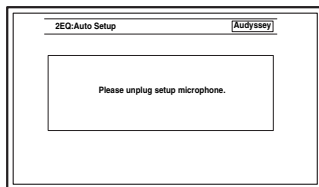
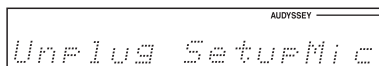
29ページの「測定のしかた」の図を参考に、③の位置にマイクを置いてください。完了するまで数分かかります。

6 すべての測定が終わると結果が表示される

▲/▼ボタンで「Save（セーブ）」または「Cancel（キャンセル）」を選びます。
「Save」を選んで決定ボタンを押すと、結果を保存します。
「Cancel」を選んで決定ボタンを押すと、結果は保存されません。

！ヒント ◀/▶ ボタンを押すと、テレビ画面のスピーカーの有無、スピーカーまでの距離、スピーカーレベル表示を切り換えることができます。

7 下記の表示が出たら、マイクのプラグを抜く

SETUP MIC

AUDYSSEY — 点灯

Unplug SetupMic

- 測定が完了すると「スピーカーの音場補正」は、「Audyssey」に設定され、「Dynamic EQ」もオンになります。(☞45ページ)

■測定途中に表示されるエラーメッセージについて

OSD画面表示：Ambient noise is too high.
本体表示部表示：Noise Error!

測定環境の雑音が大きすぎて測定できません。雑音の原因を取り除いて、再度測定してください。（測定していたポイントから再開します）

OSD画面表示：Speaker Detect Error
本体表示部表示：Sp Detect Err!

このメッセージが表示されると、次のようなエラーが考えられます。

- フロントスピーカーが検出できません。
- サラウンドスピーカーが１つしか検出できません。
- スピーカーに異常があります。スピーカーが壊れているか、サブウーファーの音量が高域を出しすぎているかもしれません。

OSD画面表示：Speaker matching error!
本体表示部表示：SpMatching Err!

1回目の測定でのスピーカー数と、2、3回目の測定でのスピーカー数が違います。
検出できないスピーカーが正しく接続されているか確認して、再度測定してください。

OSD画面表示：Writing error
本体表示部表示：Writing Error!

測定結果の保存に失敗しました。
2、3度試してもこのエラーメッセージが出る場合は、本製品が故障している可能性があります。お買い上げ店、またはお近くのオンキヨー修理窓口へご相談ください。

「Retry」を選ぶと測定をやり直します。
「Cancel」を選ぶと結果をキャンセルして終了します。

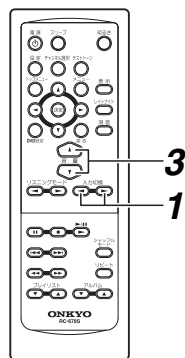
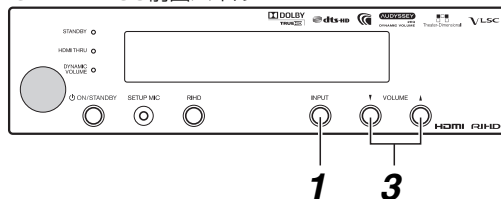
ご注意

自動設定された内容を変更したいときは、手動でスピーカー設定を行ってください。(☞39～43ページ)

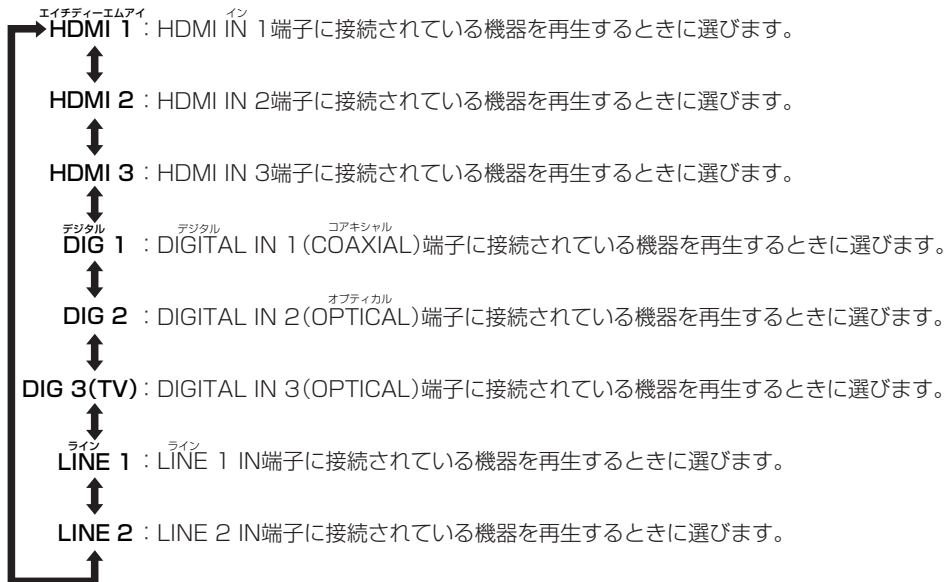
！ヒント

サブウーファーを接続している場合

サブウーファーの音声は、超低域で低い位置から出力されるために、自動スピーカー設定で認識されない場合があります。
測定結果を確認する表示で、サブウーファー（SW）が「No」に設定されるときは、サブウーファーの音量レベルを半分くらいまで上げ、周波数を最大にした状態で再度測定してください。ただし、音量を上げすぎている（音が割れているような状態）場合も認識されませんので、適切な音量に調節してください。
また、カットオフフィルター切換スイッチのあるサブウーファーを接続している場合は、「DIRECT」の状態にしてご使用ください。詳しくは、サブウーファーの取扱説明書をご覧ください。

機器を選んで再生する

リモコンのボタンは　　　で表示しています。

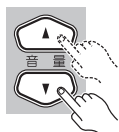
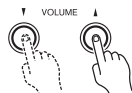
再生する機器を選ぶ

本体のINPUTボタンまたは、リモコンの入力切換◀/▶ボタンを押します。
ボタンを押すたびに入力が以下のように切り換ります。
再生したい機器が接続されている端子に合わせて入力を選んでください。
入力を選んだ後、約1秒後に切り換わります。

DIG1〜3、LINE1または2の入力表示は接続している機器に合わせて変えることができます。
28ページ「入力表示を切り換える」をご覧ください。

2

選んだ機器の再生を始める

映像機器を再生する場合は、テレビなどモニターの入力を切り換える必要があります。また、DVD対応のゲーム機などの再生機器で音声出力設定が必要な場合もあります。

3

本体のVOLUME（ボリューム）▲/▼ボタンまたは、リモコンの音量▲/▼ボタンで音量を調整する

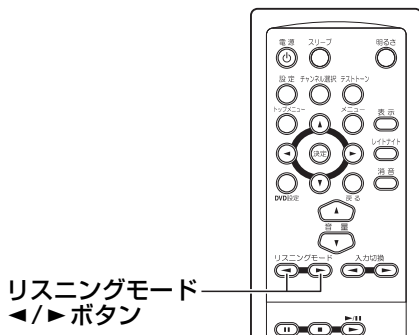
音量はMin·1·2……78·79·Maxまでの範囲で調整できます。

！ヒント

本製品はホームシアターでお楽しみいただく製品ですので、ボリューム値を細かく設定できるように音量幅を大きく持たせています。お好みで調整してください。

！ヒント 音が出ないとき

- **接続を確認する：** 選んだ入力とは異なる端子に接続されている場合があります。33ページの手順***1***で入力を切り換え、順番に再生して音が出るかを確認してください。
- **音量を確認する：** 部屋の大きさなどにもよりますが、音量の数値は通常30～45でお楽しみいただけます。音量が小さすぎないか、本体の表示部で音量の数値を確認してください。
- 必要に応じて各種設定を行ってください。（☞「入力を切り換える」28ページ、「自動スピーカー設定について」29～32ページ、「設定をする」39～50ページ）

リスニングモードを楽しむ

リモコンのリスニングモード◀/▶ボタンを押して、希望のリスニングモードを選ぶ

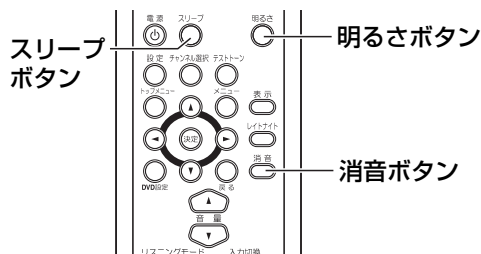
以下のように4種類のモードを選ぶことができます。

Theater-Dimensional（シアター ディメンショナル）：
本機内蔵のスピーカーだけであたかも5.1チャンネル再生しているようなバーチャル再生をお楽しみいただけます。左右それぞれの耳に届く音声の特性を制御することによって実現しています。反射音成分が大きいと期待した効果が得られない場合があるため、できるだけ反射音の少ない環境をおすすめします。

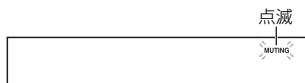
Direct（ダイレクト）：
もともとの音源に手を加えない、ピュアな音をお楽しみいただけます。入力ソースのチャンネルのまま音声を出力します。サブウーファーの設定によらず選択することができます。ただし、サブウーファー音声要素（LFE）を含まないソースを再生している時には、サブウーファーから音が出ません。

Stereo（ステレオ）：
左右フロントスピーカーとサブウーファーから出力されます。

Mono（モノ）：
モノラル信号で収録された古い映画を再生したり、2言語が記録されているソースを左右のチャンネルを独立して再生するモードです。DVDなどに記録された音声多重のサウンドトラックに適しています。

センタースピーカー、サラウンドスピーカーを増設すると、さらにいろいろなリスニングモードを楽しむことができます。詳しくは54～57ページをご覧ください。

一時的に音量を小さくする

リモコンの消音ボタンを押す

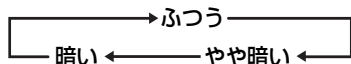
音量がごく小さくなり、消音機能が働いている間MUTINGインジケーターが点滅します。

解除するには…

もう一度消音ボタンを押してください。
MUTINGインジケーターが消え、元の音量に戻ります。

音量調整をしたり、CB-HT1200をスタンバイ状態にしたときも解除されます。

表示部の明るさを変える

リモコンの明るさボタンを押す

押すたびに表示部の明るさが3段階に切り換わります。

スリープタイマーを使う

リモコンのスリープボタンを押して、スタンバイ状態になるまでの時間を設定する

「Sleep 90 min」が表示され、90分後にスタンバイ状態になる設定になります。ボタンを押すたびに10分単位で設定時間が短くなります。

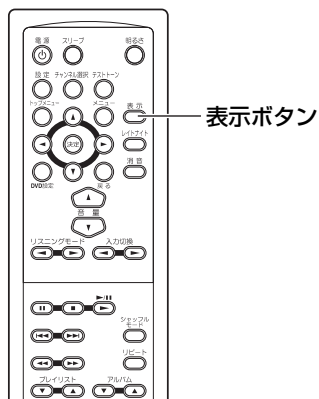
- スリープタイマー動作中は、SLEEPインジケーターが点灯します。

残り時間を確かめるには

スリープタイマー動作中にスリープボタンを押すと、スタンバイ状態になるまでの残り時間が表示されます。
ただし、残り時間が10分以下の表示のときに、再びスリープボタンを押すとスリープタイマーは解除されます。

スリープタイマーを解除するには

SLEEPインジケーターが消えるまでくり返しスリープボタンを押すか、一度スタンバイ状態にしてから再度電源を入れてください。

表示を確認する

リモコンの表示ボタンをくり返し押す

ボタンを押すたびに、表示内容が下記のように切り換わります。
- 入力されている信号により、表示される内容は異なります。

＊ アナログ信号が入力されているときは表示されません。PCM信号が入力されているときは、サンプリング周波数が表示されます。デジタル信号（PCM信号を除く）が入力されているときは、入力信号フォーマットが表示されます。
サンプリング周波数や入力信号フォーマット表示で約3秒経過すると元の表示に戻ります。

レイトナイト機能を使う

ドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHD再生時のみに効果があります。

劇場用に作られた映画音声は大きな音と小さな音の差が大きいため、環境音や人の会話などの小さな音を聞くには音量を上げる必要があります。レイトナイト機能は音量幅を小さくすることができるため、全体の音量を上げずに小さな音も聞こえます。夜中などに音量を絞って映画を鑑賞するときに便利です。この機能は、CB-HT1200をスタンバイ状態にすると解除されます。

レイトナイトボタンを押す

押すたびにモードが切り換わります。

ドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス

Off（オフ）：レイトナイト機能をオフにします。（お買い上げ時の設定）
Low（ロー）：音量幅を小さくします。
High（ハイ）：音量幅をさらに小さくします。

ドルビー TrueHD（トゥルー）

Auto（オート）：レイトナイト機能は、自動でOnかOffに設定されます。（お買い上げ時の設定）
Off（オフ）：レイトナイト機能をOffにします。
On（オン）：音量幅を小さくします。

ご注意

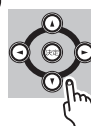
- レイトナイト機能は、ドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHD ソフトにのみ効果があります。
- コンテンツ製作者の意図により、レイトナイトのモードを変えても効果に変化のないものもあります。

一時的に各スピーカーレベルを調整する

再生中、一時的に各スピーカーのレベルをお好みに調整することができます。
この設定は、CB-HT1200をスタンバイ状態にすると解除されます。

1

再生中にリモコンのチャンネル選択ボタンを押して、音量レベルを調整するスピーカーを選ぶ

2

◀/▶ボタンを押して、各スピーカーの音量レベルを調整する

◀ボタンを押すと音量が下がり、▶ボタンを押すと上がります。－12dB～＋12dBの範囲で設定できます。（サブウーファーは、－15dB～＋12dBの範囲で設定できます。）調整後、何も操作せず5秒たつと元の表示に戻ります。

！ヒント

入力ソースにサブウーファー音声要素（LFE）が入っていない場合、サブウーファーから音が出ないことがあります。

※調整した値を記憶させたい場合は、テストトーンボタンで記憶させることができます。
（☞43ページ）

設定をする

テレビ画面に表示する

テレビをHDMI接続している場合には、テレビ画面にも表示されます。

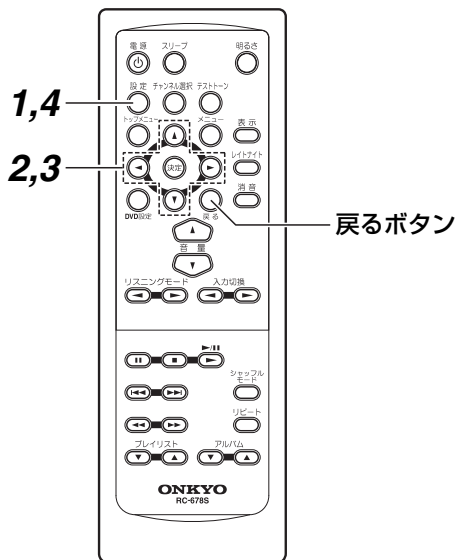
Setup Menu

1. Sp Config
2. Sp Distance
3. Level Cal
4. Audio Adjust
5. Source Setup
6. Volume Setup
7. HDMI Setup
8. AutoPowerDown

ご注意

- テレビに画面が映らない場合は、テレビ側の入力切換が本機に接続したHDMIになっているか確認してください。
- 表示されるのは、映像信号が入力されていないとき、または入力されている映像信号の解像度が480p、576p、720p、1080i、1080pのいずれかのときです。

操作のしかた

1

設定ボタンを押す

本体の表示部またはテレビ画面を見ながら操作してください。

2

▲/▼ボタンを押して設定したい項目を選び、決定ボタンを押す

▲/▼ボタンを押すごとに設定項目が切り換わり出ます。

項目	内容
1. Sp Config（スピーカー コンフィグ）	接続したスピーカーの「有/無」と「大きさ」を設定します。（☞41ページ）
2. Sp Distance（スピーカー ディスタンス）	視聴位置からスピーカーまでの距離を設定します。（☞42ページ）
3. Level Cal（レベル キャリブレーション）	各スピーカーからのテスト音の音量が同じに聞こえるようにスピーカーの音量レベルを設定します。（☞43ページ）
4. Audio Adjust（オーディオ アジャスト）	リスニングモードや接続した機器によって音響効果をお好みに設定します。（☞44ページ）
5. Source Setup（ソース セットアップ）	入力ソースの設定をします。（☞47ページ）
6. Volume Setup（ボリューム セットアップ）	ボリュームの設定をします。（☞47ページ）
7. HDMI Setup（エイチディーエムアイセットアップ）	HDMI接続した場合の設定をします。（☞48、49ページ）
8. AutoPowerDown（オート パワー ダウン）	電源を自動的にスタンバイ状態にする設定をします。（☞49ページ）

3

▲/▼ボタンを押して設定したい項目を選び、◀/▶ボタンで調整する

4

設定ボタンを押す

設定が終了します。

！ヒント 1つ前のメニューに戻るには、戻るボタンを押してください。

スピーカー環境の設定（1. Sp Config）（スピーカーコンフィグ）

自動スピーカー設定（☞29～32ページ）を行った場合は、自動で設定されていますので、この設定をする必要はありません。

Subwoofer（サブウーファー）

サブウーファーから音を出すか出さないかの設定をします。

- Yes（イエス）：サブウーファーから音を出す場合
- No（ノー）：サブウーファーから音を出さない場合

Front（フロント）

フロントスピーカーの設定をします。

- Small（スモール）：初期値です。設定を変える必要はありません。
- Large（ラージ）：Subwoofer（サブウーファー）の設定で「No」を選択した場合、「Large」に固定されます。

Center（センター）

センタースピーカーの設定をします。

- Small（スモール）：小型のセンタースピーカーを接続している場合
- Large（ラージ）：大型のセンタースピーカーを接続している場合
- None（ナン）：センタースピーカーを接続していない場合

Front（フロント）スピーカーの設定で「Small」を選択している場合、「Large」は選択できません。

Surround（サラウンド）

サラウンドスピーカーの設定をします。

- Small（スモール）：小型の左右サラウンドスピーカーを接続している場合
- Large（ラージ）：大型の左右サラウンドスピーカーを接続している場合
- None（ナン）：左右サラウンドスピーカーを接続していない場合

Frontスピーカーの設定で「Small」を選択している場合、「Large」は選択できません。

Crossover（クロスオーバー）

低音部をどの周波数でフロントスピーカーとサブウーファーに振り分けるかを設定します。
初期値（お買い上げ時の設定）は80Hzです。
本機ではフロントスピーカーが固定ですので、特に設定する必要はありませんが、お好みで設定してください。

Double Bass（ダブル バス）

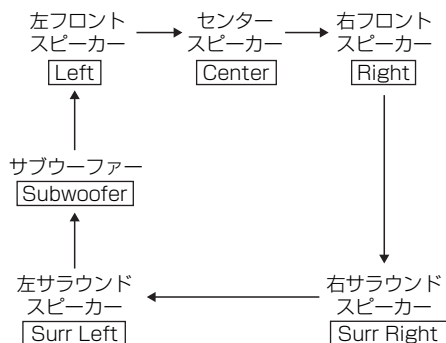
この項目は自動スピーカー設定（☞29～32ページ）では、自動設定されていません。

サブウーファーを「Yes（イエス）（有り）」にしていて、フロントスピーカーを「Large（ラージ）」に設定している場合、サブウーファーをさらに強調させることができます。

- On（オン）：サブウーファーを強調します。
- Off（オフ）：サブウーファーを強調しません。

視聴位置からスピーカーまでの距離設定（2. Sp Distance）

自動スピーカー設定（☞29～32ページ）を行った場合は、自動で設定されていますので、この設定をする必要はありません。

視聴位置からスピーカーまでの距離を設定します。距離を設定することで、それぞれのスピーカーから視聴位置までの音の届く時間を一定にし、ホームシアターをより快適にお楽しみいただけます。

上図の順にスピーカーが切り換わりますので、それぞれのスピーカーまでの距離を設定してください。
各スピーカーは、0.3m ～ 9.0m（1ft ～ 30ft）の範囲で設定できます。

Unit

設定する単位を選びます。

meters：距離をメートルで設定する。
feet：距離をフィートで設定する。

Left

左フロントスピーカーまでの距離を設定します。

Center*1

センタースピーカーまでの距離を設定します。

Right*1

右フロントスピーカーまでの距離を設定します。

Surr Right*2

右サラウンドスピーカーまでの距離を設定します。

Surr Left*2

左サラウンドスピーカーまでの距離を設定します。

Subwoofer*1

サブウーファーまでの距離を設定します。

*1 左フロントスピーカーで設定した距離の±1.5mの範囲で調整できます。
*2 左フロントスピーカーで設定した距離の−4.5mから＋1.5mの範囲で調整できます。

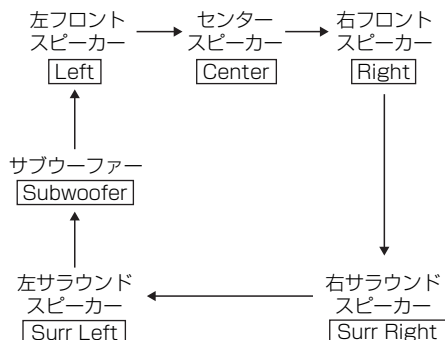
ご注意

「スピーカー環境の設定」で、「No」または「None」を選択したスピーカーは、選択できません。

スピーカーの音量レベル調整（3. Level Cal）

自動スピーカー設定（☞29〜32ページ）を行った場合は、自動で設定されていますので、この設定をする必要はありません。

各スピーカーからのテスト音の音量が同じに聞こえるように、それぞれのスピーカーの音量レベルを設定します。スタンバイ状態にしても記憶しています。

● ミューティング中は、設定できません。

「ザー」というテスト音が左フロントスピーカーより出力されます。すべてのスピーカーのテスト音が同じ音量に聞こえるように調整します。

サブウーファーは、－15dB〜＋12dBの範囲で、それ以外のスピーカーは、－12dB〜＋12dBの範囲で設定できます。

Left

左フロントスピーカーのテスト音を調整します。

Center

センタースピーカーのテスト音を調整します。

Right

右フロントスピーカーのテスト音を調整します。

Surr Right

右サラウンドスピーカーのテスト音を調整します。

Surr Left

左サラウンドスピーカーのテスト音を調整します。

Subwoofer

サブウーファーのテスト音を調整します。

ご注意

「スピーカー環境の設定」で、「No」または「None」を選択したスピーカーは、設定できません。

！ヒント

テストトーンボタンでテスト音を出して設定することもできます。

① テストトーンボタンを押して、テスト音を出します。
② 次に◀/▶ボタンでテスト音を調整し、チャンネル選択ボタンでスピーカーを切り換えます。
③ もう一度テストトーンボタンを押すと、終了します。

音響効果を調整する（4. Audio Adjust）

リスニングモードや接続した機器によって音響効果をお好みに調整しておくことができます。

■ Multiplex/Mono時の設定をする

Input (Mux)

多重音声や多重言語の放送などで音声や言語を選択します。
表示ボタンを押して､表示部に音声の数が「1＋1」と表示されたら音声多重放送です。

Main：主音声を出力します。
（お買い上げ時の設定）

Sub：副音声を出力します。

M/S：主音声と副音声の両方を出力します。

Input (Mono)

2チャンネルで収録された入力信号を「Mono」リスニングモードで再生するときに使用する信号チャンネルを設定します。

L＋R：左右チャンネルの信号を両方再生します。
（お買い上げ時の設定）

L：左チャンネルの信号を再生します。

R：右チャンネルの信号を再生します。

■ PLⅡ Music時の音質を調整する

ご注意

- 2チャンネル収録された入力信号のみに効果があります。
- スピーカーを2チャンネル（左右フロントスピーカーのみ）に設定しているときは､設定できません。

Panorama

前方の音場を横方向に広げることができます。

On：パノラマ効果をオンにします。

Off：パノラマ効果をオフにします。
（お買い上げ時の設定）

Dimension

音場を前方または後方へ移動させることができます。お買い上げ時の設定は「0」に設定されています。

！ヒント

- 「0」を中心に、＋1、＋2、＋3にすると後方へ、－1、－2、－3にすると前方へ移動します。
- 広がり感がありすぎたり、サラウンドが強すぎる場合は音場を前方に調整するとバランスが良くなります。逆にモノラル感や音場が狭い感じの場合は音場を後方に調整するとバランスが良くなります。

Center Width

センタースピーカーの音の広がり幅を調整することができます。Dolby Pro Logic IIでは、センタースピーカーがある場合はセンターチャンネルの信号をセンタースピーカーからのみ出力します。（センタースピーカーがない場合は、左右フロントスピーカーに等分に振り分け、仮想のセンター音像を作ります。）
この設定では、センタースピーカーと左右フロントスピーカーの配合を調整し、センターの音の重量感を調整することができます。お買い上げ時の設定は「3」ですが、0～7の範囲で選択できます。

■ Neo:6Music時の音質を調整する

Center Image

この設定では、左右フロントチャンネルからいくらか差し引いた音声を使ってセンターチャンネルの音声を作り出します。「0」に設定しているときにフロント音場が中央になり、「5」に設定するとフロント音場が左右に広がります。お買い上げ時の設定は「2」ですが、0～5の範囲で選択できます。

■ Audysseyの設定をする

Dynamic EQ、Reference Level、Dynamic Volumeは、自動スピーカー設定（☞29〜32ページ）が完了すると自動的に設定されます。設定の前に自動スピーカー設定を行ってください。

Audyssey

Off ： Audyssey EQ機能は働きません。

On ： Dynamic EQ機能およびDynamic Volume機能が使用できます。

Onのときは、Audysseyインジケーターが点灯します。

- Audyssey機能は、DSDソースのときには働きません。

Dynamic EQ

Audyssey Dynamic EQは、人間の聴覚や部屋の音響特性を考慮し、音量レベルを下げた際に発生する音質の低下を防ぐ技術です。
Dynamic EQは、すべての音量変化に応じて自動的に最適な周波数特性とサラウンドレベルに補正します。その結果、どのように音量レベルを変更しても、常に最適な低域特性や音質バランス、サラウンド効果を維持することができます。正しい補正を行うために、入力されるソースの情報と、リスニングルームに出力される音圧レベル情報とを組み合わせています。

Off ： Dynamic EQ機能をオフにします。

On ： Dynamic EQ機能をオンにします。

- リスニングモードがダイレクトのときは選べません。

Reference Level

映画は音響の影響を考慮して調整された環境で基準レベルでミキシングされます。
ホームシアターで同じ基準レベルで楽しむためには、スピーカーの音量レベル（Level Cal設定値）を−30dB FSの帯域制限（500Hz〜2000Hz）されたピンクノイズで75dBの音圧が視聴位置で聞こえるように調整する必要があります。
Audyssey 2EQは、音量が70のときに基準レベルで再生されるように、自動的にスピーカーレベルを調整します。
Audyssey Dynamic EQは、映画の標準ミキシングレベルを基準にしていますので音量を70よりも下げたときでもオリジナルの周波数特性とサラウンド感が得られるように自動的に調整することができます。
しかし、音楽またはフィルム以外のソースの場合は映画の基準レベルが適切というわけではありません。
Reference Levelは映画の基準レベルが使われていないソースにも対応できるように3種類のオフセットモードを用意しています。

0dB ： 映画鑑賞に適しています。（お買い上げ時の設定）

5dB ： クラッシック音楽など、とても広いダイナミックレンジを持つソースに適しています。

10dB ： ジャズや様々な音楽など、広いダイナミックレンジを持つソースに適しています。また、通常基準レベルより10dB低くミックスされたテレビ番組にも適しています。

15dB ： ポップス/ロック音楽など、高いリスニングレベルでミックスされ、限られたダイナミックレンジを持つソースに適しています。

- Dynamic EQがオフに設定されている場合は、この設定は選べません。

Dynamic Volume

Audyssey Dynamic Volumeは、テレビ番組やコマーシャル、映画などのコンテンツにおける静かな音のシーンと大きな音のシーンにおける、音量レベルの違いによって発生する問題を解決する技術です。
Dynamic Volumeは、入力されるソースを常にモニターし、リスナーが設定した好みの音量レベルに常に自動的に調整することで、リスナーを音量調整のわずらわしさから解放します。再生中のソースの中に含まれる特徴を正確にモニターし、音量の変化が急激であっても、緩やかな変化であってもソースの特徴に忠実に最適な音量値（リスナー設定値）に自動調整を行います。また、Dynamic VolumeはAudyssey Dynamic EQを取り込むことにより、音量レベルの調整時やテレビチャンネルの切り換え時、ステレオソースからサラウンドソースなどの切り換え時でも低域特性や音質バランス、サラウンド効果、セリフの明瞭さを維持させます。

オフ：Dynamic Volume機能は働きません。

ライト：低圧縮モードです。

ミディアム：標準圧縮モードです。

ヘビー：高圧縮モードです。再生中の音量差が一番小さくなります。

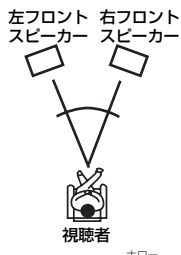
Dynamic Volume機能を働かせると、AudysseyとDynamic EQはオンになります。

- リスニングモードがダイレクトのときは、この設定は選べません。

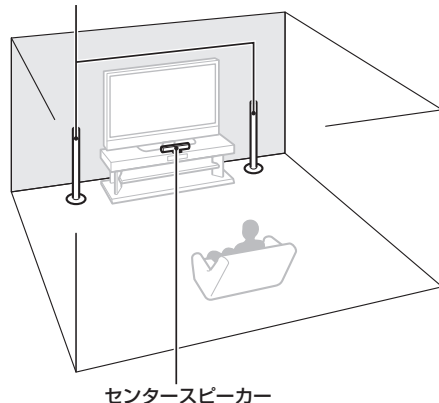
■ シアターディメンショナル時の調整をする(T-D)

Listn Angl

視聴者から見た左右フロントスピーカーに対する角度を設定します。シアターディメンショナルはこの角度をもとにバーチャル処理を行います。左右フロントスピーカーから等距離で、かつ選択したリスニングアングルに近い視聴位置が理想です。Wide（広い）、Middle（中間）とNarrow（狭い）の中から選べます。

お買い上げ時の設定はMiddleです。

Front 5.1ch

接続しているセンター、サラウンドスピーカーをすべて前方に置いてシアターディメンショナルを楽しむ場合の設定です。

（スピーカーを前方に置いた配置例）

Yes：スピーカーを前方に置いている場合に選びます。

No：通常の配置にしている場合に選びます。（お買い上げ時の設定）

ソースの設定をする (5. Source Setup)

■ 機器間の音量差を減らす

IntelliVol

CB-HT1200に複数の機器を接続している場合、CB-HT1200のボリューム位置が同じでも機器によって再生するときの音量に差が出ることがあります。この表示を出したまま、入力ソースを切り換えて音量を聞き比べながら設定すると便利です。

- −12dB〜+12dBの範囲の調整できます。

■ 映像と音声の再生にズレがあるとき

A/V Sync

映像が音声より遅れて再生されるようなとき、この設定で映像信号と音声信号を同期させることができます。0〜100ms（ミリセカンド：千分の１秒）の範囲を10msステップで、音声の遅延を調整することができます。
再生される映像を見ながら調整します。
0〜100msの範囲を10msステップで調整できます。映像と音声が同期するように、音声の遅延を調整してください。
リップシンク対応機器の場合は、リップシンク機能によって補正された遅延時間が反映されます。（☞48ページ）

ご注意

この機能は、リスニングモードを「Direct」にしているときのアナログ信号には働きません。

■ 圧縮信号の音質を良くする

M. Optimizer

この機能は、圧縮された音楽信号をより良い音質にします。MP3などの非可逆圧縮ファイルの再生時に便利です。

Off ：Music Optimizer機能をオフにします。（お買い上げ時の設定）

On ：Music Optimizer機能をオンにします。

ご注意

この機能は、48kHz以下のPCM信号とアナログ信号に働きます。また、リスニングモードが「Direct」のときは、効果がありません。

ボリューム設定をする (6. Volume Setup)

■ 最大音量を設定する

Max Volume

音量が大きくなり過ぎないように、音量の最大出力レベルを設定することができます。30〜79の範囲内で設定できます。
設定しないときは「Off」を選びます。

■ パワーオン時音量を設定する

Pon Volume

CB-HT1200の電源を入れたときの音量を一定に設定しておくことができます。
1･2…79･Maxの範囲内で設定できます。
ただし、Max Volumeを設定している場合は、その値までしか設定できません。
CB-HT1200をスタンバイ状態にする前の音量をそのまま残したい場合は「Last」を選びます。

HDMI設定をする（7. HDMI Setup）

■ オーディオテレビアウト設定

Audio TV Out

HDMI端子から音声出力を「する/しない」の設定ができます。CB-HT1200のHDMI OUT端子とテレビのHDMI入力端子を接続していて、テレビのスピーカーから音声を聞きたいときなどに設定します。通常は「Off」にしておいてください。入力信号やテレビによっては、Onにしても音が出ない場合があります。

Off ：出力しません。（お買い上げ時の設定）

On ：出力します。

ご注意

- Audio TV Outの設定が「On」で、テレビから音声が出ている場合は、スピーカーから音声が出ません。
- TV Ctrlの設定が「On」の場合は、「Auto」になります。
- お使いのテレビや入力信号によっては、設定が「On」でもテレビから音声が出ないことがあります。
- この設定を「On」にしているとき、またはTV Ctrlの設定を「On」にしているときにテレビを聞いていると、CB-HT1200の音量を上げるとCB-HT1200に接続しているスピーカーから音が出る場合があります。CB-HT1200に接続しているスピーカーの音を止めるには、設定を変更するか、テレビの設定を変更、またはCB-HT1200の音量を下げてください。

■ リップシンク設定

Lip Sync

接続したモニターからの情報により、映像と音声のズレをCB-HT1200で自動的に補正するかどうかを設定します。

Disable：自動では補正しません。
（お買い上げ時の設定）

Enable ：自動的に補正します。

ご注意

- リップシンク機能はHDMIリップシンク対応のテレビに接続している場合にのみ動作します。
- リップシンク機能によって補正される遅延時間を、A/V Syncメニューで確認することができます。（☞47ページ）

■ HDMIコントロール設定

HDMI Ctrl

CB-HT1200とHDMI接続したCEC規格対応機器やRIHD*対応機器と連動動作するかどうかを設定します。

Off：RIHD Controlを使用しません。
（お買い上げ時の設定）

On：RIHD Controlを使用します。

ご注意

- 「On」に設定しているときは、接続しているRIHD対応機器の名前と「RIHD On」が下記のように表示部に表示されます。
  「Search」→「機器の名前」→「RIHD On」
  CB-HT1200が接続機器の名前を受信できないときは、
  「Player」、「Recorder」などと表示されます。
- 接続機器が対応していない場合や、対応しているかどうか分からない場合は「Off」に設定してください。
- 「On」に設定して、おかしな動作をする場合は「Off」にしてください。

■ ARC(オーディオリターンチャンネル)設定

ARC

ARC(オーディオリターンチャンネル)は、HDMI接続しているテレビからの音声をCB-HT1200のHDMI OUT端子に送る機能です。この機能を使用するためにはテレビ側もARCに対応している必要があります。

Off：ARC機能を使用しないときに選択してください。

Auto：ARC機能を使用するときに選択してください。テレビからの音声信号をCB-HT1200のHDMI OUT端子に送ることができます（お買い上げ時の設定）

ご注意

- ARCはHDMI Ctrl設定が「On」のときに設定できます。
- テレビの入力を切り換えると、CB-HT1200の入力は自動的に「ARC（TV）」になります。

■ パワーコントロール設定

Power Ctrl

HDMIで接続された RIHD 対応機器と電源連動させたい場合に「On」にします。
HDMI Ctrl設定がOnのときは、自動的にOnに設定されます。

Off：Power Ctrlを使用しません。

On：Power Ctrlを使用します。
（お買い上げ時の設定）

ご注意

- HDMI Ctrl設定が「On」のときに設定できます。
- この機能はPower Control機能に対応しているRIHD対応機器と接続しているときのみ動作します。ただし、接続機器の状態によっては連動しない場合があります。
- 「On」に設定しているときは、以下のような状態になります。
  - * **HDMI THRU機能が働きます。**
    これはHDMI入力端子から入力された映像音声信号がHDMI出力端子に接続されたテレビや他の機器に出力される機能でCB-HT1200の電源がオンでもスタンバイ状態でも働きます。
  - * この機能が働いているときは、スタンバイ状態のときにHDMI THRUインジケーターがオレンジ色に点灯します。
  - * この機能が働いているときは、CB-HT1200の待機時消費電力が増えます。
- 接続した機器の取扱説明書もご覧ください。

■ TVコントロール設定

TV Ctrl

HDMI接続したRIHD対応テレビから、CB-HT1200をコントロールしたいときに「On」にします。

Off：TV Ctrlを使用しません。

On：TV Ctrlを使用します。
（お買い上げ時の設定）

ご注意

- テレビが対応していない場合や、対応しているかどうか分からないときは、「Off」に設定してください。
- 接続した機器の取扱説明書もご覧ください。
- この設定は、HDMI CtrlとPower Ctrlの両方の設定が「On」の場合に変更できます。

> ご注意
>
> HDMI Ctrl、Power Ctrl、TV Ctrl の設定を変更したあとは、すべての接続機器の電源を一度オフにして、再度入れ直してください。また、接続機器の取扱説明書も必ずお読みください。

CB-HT1200の電源を自動的にスタンバイ状態にする（8. AutoPowerDown）

CB-HT1200の電源を自動的にスタンバイ状態にすることができます。

■ 自動電源オフ設定

AutoPowDown

CB-HT1200に約2時間入力が無かったり、約2時間CB-HT1200を操作しなかった場合、CB-HT1200の電源を自動的にスタンバイ状態にすることができます。

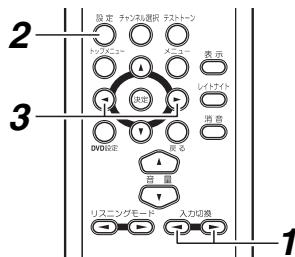
Off：AutoPowerDown機能は働きません。
（お買い上げ時の設定）

On：AutoPowerDown機能が働きます。

ご注意

設定が「On」のときは、信号が入力されていてもそのレベルが低い場合、約2時間後に本機がスタンバイ状態になることがあります。

デジタル入力モードをDTS、PCMに固定する

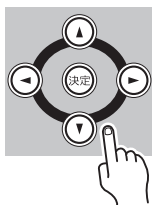
DTSやPCM信号の再生中にノイズや曲間の頭切れが気になる場合は、設定することをおすすめします。デジタル入力をDTSまたはPCMに固定することができます。

1

リモコンの入力切換◀/▶ボタンで設定する機器を選ぶ

2

設定ボタンを約3秒間押し続ける

現在のデジタル入力モード「Fixed Mode（フィックスド モード）：Auto（オート）」が表示されます。

3

「Fixed Mode（フィックスド モード）：Auto（オート）」表示中（約3秒間）に◀/▶ボタンを（くり返し）押して、デジタル入力モードを選ぶ

押すたびに、下記のように表示が切り換わります。

→ Auto ←→ PCM ←→ DTS ←

Auto（オート）（お買い上げ時の設定）：

デジタル信号を再生します。

PCM：

AutoでCDなどのPCMの曲間で頭切れが気になる場合に選択してください。2チャンネルのPCMだけが再生できます。

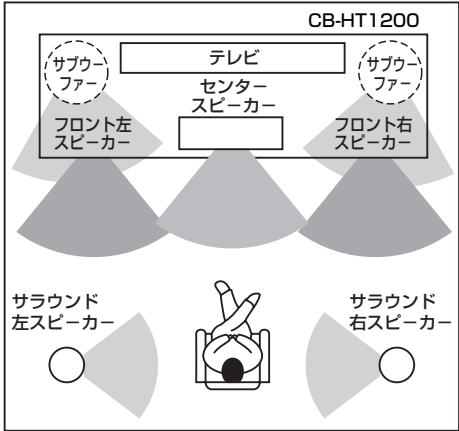
DTS：

AutoでDTS-CDを再生するとき、DTS信号を識別して読み取る間や、CDの早送り、早戻しをするときのノイズが気になる場合に選択してください。DTS-HD以外のDTS音声を再生できます。

ご注意

DTS対応のCDやLDを再生するときは、必ず「Auto」または「DTS」を選択してください。「PCM」を選択すると、ノイズが出力されます。

ホームシアターを楽しもう

センタースピーカーやサラウンドスピーカーを追加してホームシアターを楽しみましょう。本製品は優れた機能を使って音の立体感、移動感を実現し、ご家庭で簡単に劇場やコンサートホールさながらの臨場感あふれる音響効果をお楽しみいただけます。再生する信号や、接続するスピーカーの数によって、DTS やドルビーデジタル再生、オンキヨー独自のリスニングモードをお楽しみいただけます。

5.1チャンネルの配置例

左図のように、すべてのスピーカーを接続すると最も理想的なサラウンド効果を得ることができます。しかし、センタースピーカーやサラウンドスピーカーがないときは、センタースピーカーやサラウンドスピーカーから出力される音声を他のスピーカーに最適に配分し、現在のスピーカー構成で可能なサラウンド効果を最大に引き出します。

本機内蔵サブウーファー
低音のみを出力し、迫力ある重低音効果を最大限に発揮します。

本機内蔵左右フロントスピーカー
総合的に音声を出力します。ホームシアターの柱となり、音場をしっかりと整える役割を果たします。

センタースピーカー（本製品には付属していません）
左右フロントスピーカーの音響効果や音の動きを明確にして、より豊かなサウンドイメージを作ります。映画ではとくにセリフが出力されます。できるだけ画面の近くで、視聴者の耳に向くように配置してください。左右フロントスピーカーとなるべく同じ高さになるように配置してください。

左右サラウンドスピーカー（本製品には付属していません）
臨場感を高める役割を果たします。効果音などで音の立体的な動きを表現します。視聴位置の横または後斜めに配置します。左右対称で視聴者の耳より 1 m高い位置が理想です。

本製品と接続するスピーカーの使いかた

本製品以外に現在お持ちのスピーカーの数により、そのスピーカーを下図のように各チャンネルのスピーカーとして使用することができます。

スピーカー数 / 使用スピーカー	1	3
センタースピーカー	○	○
左右サラウンドスピーカー		○

複数のスピーカーを使った接続をする

内蔵のスピーカーに加えて別売のフロントスピーカーやサラウンドスピーカーをご使用になると、5.1チャンネル音声をお楽しみいただけます。使用されるスピーカーの数によって、接続する端子を選んでください。
組み合わせるスピーカーは6Ω以上のものをご使用ください。スピーカーのプラス⊕とCB-HT1200のプラス⊕、スピーカーのマイナス⊖とCB-HT1200のマイナス⊖を接続します。

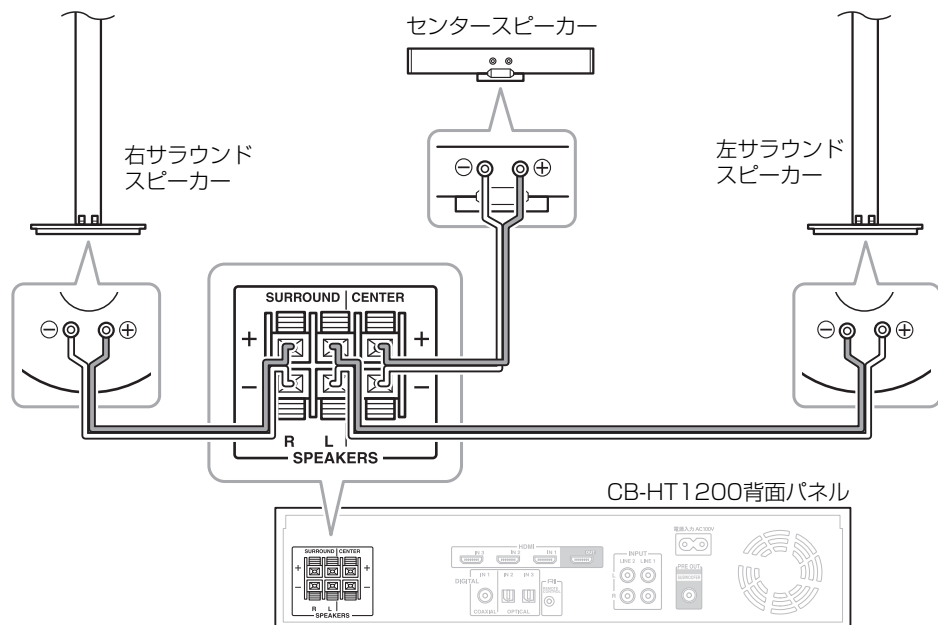
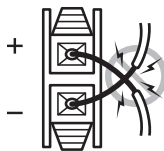
■ 5.1チャンネル接続の場合

センタースピーカー

右サラウンド
スピーカー

左サラウンド
スピーカー

SURROUND | CENTER
R L
SPEAKERS

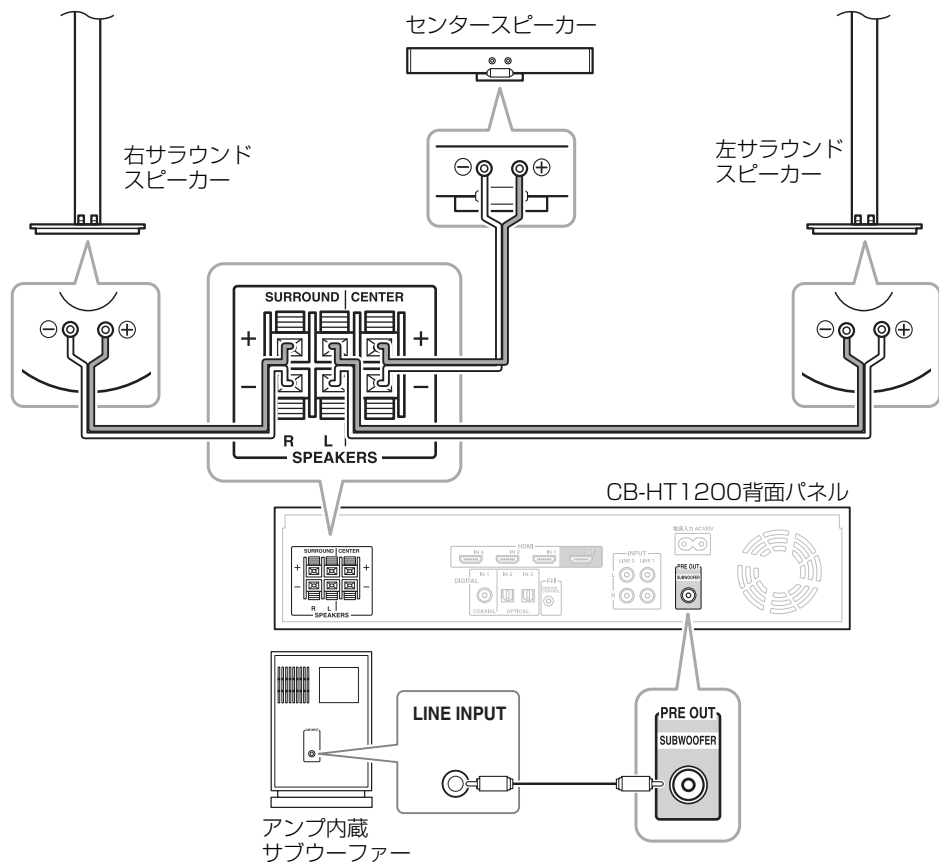
CB-HT1200背面パネル

危険
回路の故障を防ぐため、スピーカーコードのしん線どうしを絶対に接触させないでください。
また、リアパネルにも触れないように、ご注意ください。

ご注意

プラス⊕とマイナス⊖を間違って接続したり、左右のスピーカーを間違えて接続すると、音声が不自然になりますのでご注意ください。

- 最適なサラウンド再生をお楽しみいただくには、付属の測定用マイクを使って自動スピーカー設定を行ってください。(☞29～32ページ)

アンプ内蔵サブウーファーを接続する

よりパワーのある重低音をお楽しみいただくには、パワーアンプ内蔵のサブウーファーをCB-HT1200のPRE OUT(SUBWOOFER)端子に接続します。

ご注意

自動スピーカー設定をして何度もエラーが出るなどうまくいかないときは、手動で設定してください。

! ヒント

- 再生される低音の質や量は、置き場所や部屋の形状、視聴位置によって変わります。一般的に部屋の隅、または1/3の場所に置いたときに良い結果が得られますが、色々な場所に置いて質の良い低音が入った音楽を再生し、もっともしっかりした低音が再生できる場所に設置してください。
- サブウーファー側で設定ができる場合、音量を上げてください。また、カットオフフィルター切換スイッチは「DIRECT」にしてください。カットオフフィルタースイッチがなく、カットオフ周波数調整ツマミがある場合は、周波数を最大にしてください。

入力ソースの種類と対応するリスニングモード

スピーカーを増設し、CB-HT1200のリスニングモードを使うと、お部屋にいながら映画館やコンサートホールなどの臨場感あふれる雰囲気を味わっていただけます。

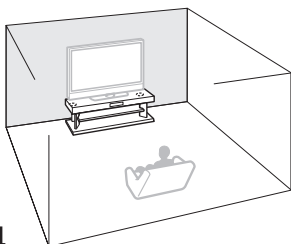
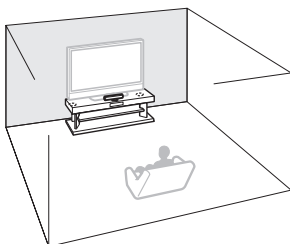
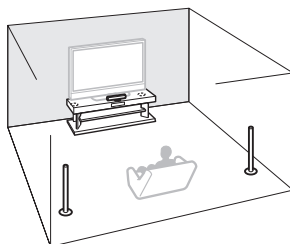
ご注意

スピーカーを増設した場合は、あらためて自動スピーカー設定（☞29～32ページ）をするか、手動でスピーカー設定（☞38～42ページ）をしてください。

■入力ソースの種類

CB-HT1200のリスニングモードは、下記の入力ソースで楽しむことができます。

MONO	モノラル音声です。
STEREO	ステレオ音声です。左右それぞれ独立した音声が出力されます。
5.1ch	5.1チャンネルサラウンド音声です。左右フロントスピーカー、センタースピーカー、左右サラウンドスピーカーの5チャンネルとサブウーファーチャンネルで構成されます。
7.1ch	7.1チャンネルサラウンド音声です。5.1チャンネルに2本の左右サラウンドバックスピーカーを追加することでより臨場感を高めています。 ご注意 CB-HT1200では7.1チャンネル音声を5.1チャンネル音声で出力します。

■スピーカー配置例

■リスニングモードの種類

CB-HT1200には以下のリスニングモードがあります。

リスニングモード	リスニングモードの説明	入力ソース	スピーカーの配置例
ダイレクト Direct	もともとの音源に手を加えない、ピュアな音をお楽しみいただけます。入力ソースのチャンネルのまま音声を出力します。サブウーファーの設定によらず選択することができます。ただし、サブウーファー音声要素（LFE）を含まないソースを再生している時には、サブウーファーから音が出ません。	MONO STEREO 5.1ch 7.1ch	2.1 3.1 5.1
ステレオ Stereo	左右フロントスピーカーとサブウーファーから出力されます。		
モノ Mono	モノラル信号で収録された古い映画を再生したり、2言語が記録されているソースを左右のチャンネルを独立して再生するモードです。DVDなどに記録された音声多重のサウンドトラックに適しています。		
マルチチャンネル Multich	PCMでマルチチャンネルソース再生時のモードです。	5.1ch	3.1 5.1
ドルビー プロ ロジック Dolby Pro Logic II	2チャンネルで収録された音楽や映画を5.1チャンネルで再生できます。 •Dolby PL II Movie（ムービー） VHSやDVDビデオ、またはテレビ番組再生時に楽しむことができます。 •Dolby PL II Music（ミュージック） CDなどのステレオ音楽や、ライブを記録したDVDに適しています。 •Dolby PL II Game（ゲーム） ゲームディスクを楽しむときに使用できます。	STEREO	3.1 5.1
ドルビー デジタル Dolby Digital	これらのモードは、入力されたソースをサラウンド音声処理しないでそのまま出力します。	5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
ドルビー デジタル プラス Dolby Digital Plus		5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
ドルビー トゥルーエイチディー Dolby TrueHD		5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
DTS		5.1ch	3.1 5.1
ハイ リゾリューション オーディオ DTS-HD High Resolution Audio		5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
マスター オーディオ DTS-HD Master Audio		5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
エクスプレス DTS Express		STEREO 5.1ch	3.1 5.1
DSD		5.1ch	3.1 5.1

リスニングモード	リスニングモードの説明	入力ソース	スピーカーの配置例
AAC	MPEG-2 AAC方式で圧縮されたデジタルデータで、最大5.1チャンネルのサラウンド音声を提供します。地上デジタル、BS/CSデジタル放送などのAACソースを再生するために使用します。	5.1ch	3.1 5.1
DTS 96/24	DTS 96/24ロゴのついたCD、DVD、LDなどに使用できるリスニングモードです。きめ細やかな音声をお楽しみいただけます。	5.1ch	3.1 5.1
DTS Neo：6	2チャンネルで収録されたソースを5.1チャンネルで再生するモードです。すべてのチャンネルに広い周波数帯域が確保され、チャンネル間の独立性も優れています。映画に最適なCinemaモードと音楽再生に最適なMusicモードが選択できます。 •Neo：6 Cinema リアルで移動感にあふれたサラウンドが再現され、2チャンネルのVHSやDVDビデオ、テレビ番組に適しています。 •Neo：6 Music サラウンドチャンネルを使用することで通常の2チャンネル出力では得られない自然な音場を生み出します。2チャンネルで収録されたCDなどに適しています。	STEREO	3.1 5.1

オンキヨー独自のリスニングモード

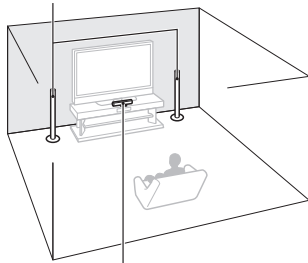
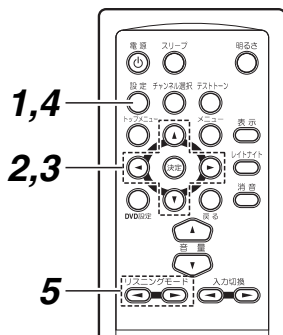
リスニングモード	リスニングモードの説明	入力ソース	スピーカーの配置例
Orchestra	クラシックやオペラに適したモードです。 音声イメージが全体に広がるようなサラウンド感を強調。大ホールで聞いているような自然な響きが楽しめます。	MONO STEREO 5.1ch	5.1
Unplugged	アコースティックやボーカル、ジャズなどに適したモードです。フロントの音場イメージを重視することで、あたかもステージの前で聞いているような音場イメージを作ります。		
Studio-Mix	ロック、ポピュラーミュージックなどに適したモードです。パワフルな音響イメージを再現した臨場感あふれるサウンドをお楽しみいただけます。		
TV Logic	放送局のスタジオから放映されているテレビ放送に適したモードです。 局のスタジオにいるような臨場感を高めます。すべてのサラウンド音声を強調し、会話音声を明瞭にします。		
Game-RPG	ロールプレイングゲームのときに選びます。		
Game-Action	アクションゲームのときに選びます。		
Game-Rock	ロックゲームのときに選びます。		
Game-Sports	スポーツゲームのときに選びます。		

リスニングモード	リスニングモードの説明	入力ソース	スピーカーの配置例
オールチャンネル ステレオ All Ch Stereo	BGMとして音楽をかけるときに便利なモードです。フロントだけでなく、サラウンドからもステレオの音声を再生し、ステレオイメージを作ります。	MONO STEREO 5.1ch 7.1ch	3.1 5.1
フル モノ Full Mono	すべてのスピーカーからモノラル音声で再生されます。どの場所にいても同様の音楽を聞くことができます。		
シアター Theater- ディメンショナル Dimensional	2つまたは3つのスピーカーであたかも5.1チャンネル再生しているようなバーチャル再生をお楽しみいただけます。左右それぞれの耳に届く音声の特性を制御することによって実現しています。反射音成分が大きいと期待した効果が得られない場合があるため、できるだけ反射音の少ない環境をおすすめします。		2.1 3.1 5.1 フロント チャンネル Front 5.1ch (☞46ページ参照)

聴きたいリスニングモードが選べない

- デジタル接続はしましたか？(☞22ページ)または、HDMI接続はしましたか？(☞20、21ページ)
  ドルビーデジタルやDTSのリスニングモードを楽しむときは、デジタル接続をする必要があります。
- 再生機器側のデジタル出力設定は、正しいですか？
  ドルビーデジタルやDTSロゴのついたDVDの本編を再生中に、CB-HT1200のPCM表示が点灯していたら、再生機器側のデジタル出力設定がPCMになっている場合があります。再生機器側で他の信号も出力するように設定してください。

シアターディメンショナル(Theater-Dimensional)のFront 5.1chモードを使う

接続しているセンター、サラウンドスピーカーをすべて前方に置いてシアターディメンショナルを楽しむことができます。

1. 設定ボタンを押す
   本体の表示部またはテレビ画面を見ながら操作してください。
2. ▲/▼ボタンを押して「4.Audio Adjust（オーディオ アジャスト）」を選び、決定ボタンを押す
   ▲/▼ボタンを押すごとに設定項目が切り換わります。
3. ▲/▼ボタンを押して「Front 5.1ch（フロント チャンネル）」を選び、◀/▶ボタンで「Yes（イエス）」を選ぶ
4. 設定ボタンを押し、設定を終了します
5. リスニングモード◀/▶ボタンを押して、「Theater-Dimensional（シアター ディメンショナル）」を選ぶ

取り扱い上のご注意

■お手入れについて

本機の表面は時々柔らかい布でからぶきしてください。汚れがひどいときは、中性洗剤をうすめた液に、柔らかい布を浸し、固く絞って汚れをふき取ったあと乾いた布で仕上げをしてください。固い布や、シンナー、アルコールなど揮発性のものは、ご使用にならないでください。
化学ぞうきんなどをお使いになる場合は、それに添付の注意書きなどをお読みください。
スピーカーのサランネットにほこりがついたときは、掃除機で吸い取るかブラシをかけるとよくほこりを取ることができます。

■テレビやパソコンとの近接使用について

一般にテレビやパソコンに使用されているブラウン管は、地磁気の影響さえ受けるほどデリケートなものですので、普通のスピーカーを近づけて使用すると、画面に色むらやひずみが発生します。
本機は防磁設計ではありません。
ブラウン管テレビを本機の上に乗せてご使用になると、色むらやひずみが生じる場合があります。
そのときは、テレビを本機から離してください。

■取り扱い上のご注意

本機は通常の音楽再生では問題ありませんが、次のような特殊な信号が加えられますと、過大電流による焼損断線事故のおそれがありますのでご注意ください。

① FMチューナーが正しく受信していないときのノイズ
② 発振器や電子楽器等の高い周波数成分の音
③ オーディオチェック用CDなどの特殊な信号音
④ マイク使用時のハウリング
⑤ テープレコーダーを早送りしたときの音
⑥ アンプが発振しているとき
⑦ ピンコードなど、接続端子の抜き差し時のショック音

困ったときは

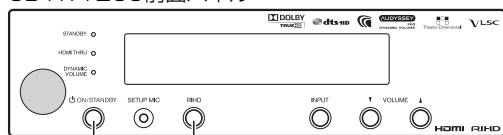
まず下記の内容を点検してみてください。接続した他の機器に原因がある場合もありますので、他機器の取扱説明書も参照しながらあわせてご確認ください。
オンキヨーホームページからも、製品の取り扱い方法やFAQ（よくあるご質問）をお調べいただくことができます。
http://www.jp.onkyo.com/support/
●文章の最後にある数字は参照ページ数です。

！ヒント　修理を依頼される前に

CB-HT1200が動作しなくなったり、操作ができなくなったときに、CB-HT1200のマイコンをリセットすることで、トラブルが解消されることがあります。修理を依頼される前に、下記の手順でマイコンをリセットしてみてください。

マイコンのリセットについて

登録したレベル設定などをすべてお買い上げ時の設定に戻したいときは、以下の手順でCB-HT1200のマイコンをリセットできます。

CB-HT1200前面パネル

ON/STANDBY（オン スタンバイ）ボタン　RIHDボタン

電源の入った状態で本体のRIHDボタンを押しながら、ON/STANDBY（オン スタンバイ）ボタンを押す

表示部に「Clear（クリア）」と表示され、CB-HT1200の設定がお買い上げ時の状態に戻ります。

電　源

電源が入らない

- 電源プラグがコンセントから抜けていないか確認してください。
- 本体側の電源端子から電源プラグが外れていないか確認してください。
- 一度電源プラグをコンセントから抜き、5秒以上待ってから再度コンセントに差し込んでください。

音　声

音声が出ない

- 接続コードのプラグは奥まで差し込んでください。
- 接続した機器の入力端子/出力端子に間違いがないか確認してください。
- 入力が正しく選択できているか確認してください。 （33）
- 保護回路が働いている可能性があります。スピーカーコードがショートしていないか、CB-HT1200背面の端子、コード、スピーカー背面端子をご確認ください。 （52、53）

- スピーカーコードの⊕、⊖は正しく接続されているか、スピーカーコードのビニール部分がスピーカー端子にはさまっていないか確認してください。 (52)
- ボリューム位置を確認してください。CB-HT1200は基本的にMin･1･2･･･78･79･Maxまで調整できます。一般のご家庭で50前後までボリュームを上げていても、正常な範囲です。 (34)
- 接続した再生機器側で出力設定を確認してください。
- HDMI入力した音声が出力されない場合は、プレーヤー側の出力設定を変更してください。
- 接続した機器でのデジタル音声出力の設定を確認してください。DVD対応のゲーム機など、機器によっては初期設定がOFFになっていることがあります。
- デジタル入力モードの設定の確認を行ってください。「DTS」や「PCM」に固定されていると、それ以外の音声を出力しません。 (50)

エラーメッセージが出る
- 操作中、表示部に表示されるメッセージは以下の内容を意味します。
  Not available： その機能は使えないということを意味します。たとえば、ドルビーデジタル以外の入力信号のためレイトナイト機能が設定できないときなどに表示されます。
  Muting On： ミューティング（消音）機能がONになっているため設定できません。

DTS、PCMのインジケーターが点滅している
- デジタル入力モードを固定している場合、その固定されたフォーマット以外の信号が入力されています。設定を確認し、デジタル入力モードを「Auto」にしてください。 (50)

センタースピーカーやサラウンドスピーカーから音が出ない/サブウーファーから音が出ない
- リスニングモードによっては、音声の出力されないスピーカーがあります。他のリスニングモードを選んでください。
- 再生するソースによっては､ドルビープロロジックIIのリスニングモードは音が出にくい場合があります。5.1ch対応のDVDソフトやBSデジタルの5.1ch放送は臨場感を表現する信号が含まれていることが多いですが、CDや一般の放送には含まれていないのが一般的ですので、他のリスニングモードをお選びください。
- パソコンやゲーム機、DVDプレーヤーなどの接続した再生機器側で出力設定を確認してください。

音が良くない
- スピーカーコードのプラス⊕/マイナス⊖が正しく接続されているかご確認ください。 (52、53)
- 自動スピーカー設定をもう一度行うか、スピーカーの「有/無」､「距離」､「音量」設定を手動で行ってください。 (41〜43)
- ピンコードのプラグは奥まで差し込んでください。 (23)

レコードプレーヤーの音が小さい
- レコードプレーヤーがフォノイコライザー内蔵か、お確かめください。
  内蔵していないレコードプレーヤーの場合は別途フォノイコライザーが必要です。

レコードプレーヤーが再生できない
- MCカートリッジタイプのレコードプレーヤーをお使いの場合は、昇圧トランスまたはヘッドアンプとフォノイコライザーが必要です。

〈音質について〉
電源プラグの極性を変えると音が良くなることがあります。
電源投入後10〜30分程度経過した方が音質は安定します。

特定のスピーカーから音が出ない

テスト音は出ますか？

スピーカーの音量レベル調整で、接続したすべてのスピーカーから個別にテスト音が出ているか確認してください。 （43）

表示部にスピーカーの表示は出るが、テスト音が出ない

- 音の出ないスピーカーの接続が正しくない可能性があります。
  スピーカーコードの芯線部分がCB-HT1200のスピーカー端子の金属部で固定されているか確認してください。
  コードが折れ曲がったり損傷していないか確認してください。

テスト音も出ず、表示部にも表示されない

- スピーカーの設定が正しくない可能性があります。もう一度、自動スピーカー設定をするか、スピーカーの「有/無」の設定を手動で行ってください。 （29～32、39～41）

テスト音は出るが、音が出ない

- 再生するソースによっては音が出にくいスピーカーがあります。
- サブウーファー音声要素（LFE）の入っていないソフトを再生している場合、サブウーファーから音が出ないことがあります。

表示と違うスピーカーから音が出る

- スピーカーの接続が正しくありません。それぞれのスピーカーが正しい端子に接続されているか確認してください。 （52、53）

リスニングモードによっては音が出ないスピーカーがあります

センタースピーカーからしか音が出ない

- テレビやAM放送などモノラル音源を再生するときに、リスニングモードをドルビープロロジックIIにすると、センタースピーカーに音が集中します。

センタースピーカーやサラウンドスピーカーから音が出ない

- リスニングモードが「Stereo（ステレオ）」、「Mono（モノ）」のときは、センタースピーカーやサラウンドスピーカーから音が出ません。

サブウーファーから音が出ない

- 入力ソースにサブウーファー音声要素（LFE）が入っていない場合、サブウーファーから音が出ないことがあります。

希望する信号フォーマットで聞くことができない(Dolby（ドルビー） Digital（デジタル）、DTSやAACのフォーマットにならない)

Dolby Digital、DTSやAACの音声を聞くためには、デジタル接続が必要です。

- 接続した機器でのデジタル出力の設定を確認してください。DVD対応のゲーム機など、機器によっては初期設定でデジタル出力がOFFになっていることがあります。

希望するリスニングモードが選べない

- スピーカーの接続状況によっては選択できないリスニングモードがあります。「リスニングモードの種類」でご確認ください。 （55～57）

音量調整が80(Max)以下で終わる

- 付属の測定用マイクで自動スピーカー設定をした場合や、スピーカーの音量調整をした場合は、音量最大値が変わることがあります。

ノイズが出る

- オーディオ用ピンコードと電源コードなどを束ねると音質が劣化しますので避けてください。
- 接続コードが影響を受けている可能性がありますので、接続コードの位置を動かしてみてください。

レイトナイト機能が働かない

- 再生ソースがドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHDのいずれかになっているか確認してください。 （38）

DTS信号について
- DTS信号を再生しているときは、CB-HT1200のDTSインジケーターが点灯します。プレーヤー側での一時停止やスキップ操作時に発生するノイズを防ぐため、再生が終了してもDTSインジケーターが点灯したままになります。このため、DTS信号から急にPCM信号に切り換わるタイプのソフトは、PCMがすぐに再生されない場合があります。このときはプレーヤー側で再生を約3秒以上中断し、再び再生を行うと正常に再生されます。
- 一部のCDまたはLDプレーヤーでは、CB-HT1200とデジタル接続をしても正しくDTS再生ができない場合があります。出力されているDTS信号に何らかの処理（出力レベル調整、サンプリング周波数変換、周波数特性変換など）が行われていると、CB-HT1200が正しいDTS信号とみなすことができず、ノイズを発生することがあります。
- DTS対応ディスクを再生しているときにプレーヤー側で一時停止やスキップなどの操作をすると、ごく短時間ノイズが発生する場合がありますが、これは故障ではありません。

HDMI入力音声が頭切れする
- HDMI信号は、他のデジタル音声信号に比べてフォーマット認識に時間がかかるため、音の出だしが遅れることがあります。

リ モ コ ン

リモコンが働かない
- 電池の極性（⊕、⊖）が、表示通り正しく入っているか確認してください。 (11)
- 電池を2本とも新しいものと交換してみてください。
（種類の異なる電池の使用や、新しい電池と古い電池の混用はさけてください） (11)
- リモコンと本体の間が離れすぎていませんか？リモコンと本体の間に障害物がありませんか？ (11)
- リモコン受光部に強い光（インバータ蛍光灯や直射日光）が当たっていませんか？ (11)
- **オンキヨー製DVDプレーヤーやRIドックの操作ができない**
- オンキヨー製他機器とRIケーブルが正しく接続されているか確認してください。RIケーブルを接続している場合、オーディオ用ピンコードも接続してください。（RIケーブルだけでは正しく連動しません） (24)
- リモコンをCB-HT1200のリモコン受光部に向けてください。 (11)
- 入力表示が正しく設定されているか確認してください。 (28)

他機器との接続

接続した機器の音が出ない
- 入力切り換えを確認してください。
- オーディオ用光デジタルケーブルが折れ曲がったり損傷していませんか？
- フォノイコライザーを内蔵していないレコードプレーヤーは、別売のフォノイコライザーを中継してください。

テレビの映像がにじむ
- テレビからスピーカーを離してください。

その他

自動スピーカー設定中に「Noise Error!」というメッセージが出る
- お使いのスピーカーに異常があることも考えられます。スピーカーの出力などを点検してみてください。 (32)

多重音声の言語を切り換えたい
- 「Input (Mux)」で主音声/副音声を選択します。 (44)

スピーカーの距離設定が希望通りにならない

- 設定する数値がホームシアターに適した数値に矯正されることがあります。 （42）

音量に関する設定を希望通りの数字にできない

- 付属の測定用マイクで自動スピーカー設定をした場合や、ボリューム設定をした場合は、設定できる音量最大値が変わることがあります。 （47）

キャビネットから「ピシッ」と音がする

- 部屋の温度や湿度が変わると、キャビネットが伸縮して時に「ピシッ」という音がする場合があります。これは故障ではありません。

CB-HT1200はマイクロコンピューターにより高度な機能を実現していますが、ごくまれに外部からの雑音や妨害ノイズ、また静電気の影響によって誤動作する場合があります。そのようなときは、電源プラグを抜いて、約5秒後にあらためて電源プラグを差し込んでください。

製品の故障により正常に録音・録画できなかったことによって生じた損害（CDレンタル料等）については保証対象になりません。
大事な録音をするときは、あらかじめ正しく録音･録画できることを確認の上、録音･録画を行ってください。

CB-HT1200の電源コードをコンセントから抜くときは、CB-HT1200をスタンバイ状態にしてから抜いてください。

HDMIについて

■ HDMI（High-Definition Multimedia Interface）とは

放送のデジタル化などの変化に対応して、家庭内でテレビ/プロジェクター、ブルーレイディスク/DVDプレーヤーなどの映像機器間をデジタル接続することを目的として策定されたインターフェース規格です。
従来は機器間の接続に、ビデオ、オーディオ、コントロールの各信号用に複数のケーブルを使用していましたが、HDMIケーブルを1本接続するだけで、コントロール、デジタルビデオおよび最大8チャンネルのオーディオデジタル信号（2チャンネルPCM、マルチチャンネル音声、マルチチャンネルPCM）を送ることができます。
HDMIビデオ信号は、従来のDVI（Digital Visual Interface）*[1]と互換性があり、HDMI-DVI変換ケーブルを用いてテレビやディスプレイのDVI端子と接続することもできます。（テレビやディスプレイによっては、働かないこともあります。）
CB-HT1200は、HDCP（High-bandwidth Digital Content Protection）*[2]を採用していますので、HDCP対応機器の映像を表示することができます。

CB-HT1200のHDMIインターフェースは、下記標準に基づいています。
Audio Return Channel、3D、x.v.Color、Deep Color、リップシンク、DTS-HD マスター オーディオ、DTS-HD ハイリゾリューションオーディオ、ドルビー TrueHD、ドルビーデジタルプラス、DSD、AACおよびマルチチャンネルPCM

対応音声フォーマット

- 2チャンネルリニアPCM（32～192kHz、16/20/24bit）
- マルチチャンネルリニアPCM（最大7.1ch、32～192kHz、16/20/24bit）
- ビットストリーム（ドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビー TrueHD、DTS、DTS-HD ハイレゾリューションオーディオ、DTSエクスプレス、DTS-HD マスターオーディオ、DSD、AAC）

ただし、プレーヤー側も上記の音声フォーマットのHDMI出力に対応している必要があります。

■ 著作権保護について

CB-HT1200はHDCP（High-bandwidth Digital Contents Protection）に対応していますので、CB-HT1200とHDMI接続する機器もHDCPに対応していることが必要です。

[1] DVI（Digital Visual Interface）：DDWG[3]が、1999年に策定したデジタルディスプレイ・インターフェース規格。

*[2] HDCP（High-bandwidth Digital Content Protection）：Intelが開発したHDMI/DVI用の映像向けの暗号化処理方式。映像コンテンツ保護を目的にしており、暗号化された信号を受信するには、HDCP準拠のHDMI/DVIレシーバーが必要になる。

*[3] DDWG（Digital Display Working Group）：Intel、Compaq、富士通、Hewlett Packard、IBM、NEC、Silicon Imageなどが中心となって運営するディスプレイのデジタルインターフェースの標準化を推進する団体。

ご注意

- HDMIビデオ信号は、DVIと互換性があり、HDMI-DVI変換ケーブルを用いてテレビやディスプレイのDVI端子と接続することができますが、動作を保証するものではありません。また、PC（パソコン）からの映像には対応していません。（DVIは映像のみに対応していますので、音声は別途接続が必要です。）
- HDMI音声信号は、接続機器により制約されることがあります。HDMI接続している機器から入力される画像の品質がよくなかったり、音声が出なかったりするときは、接続機器側の設定を確認してください。詳しくは、接続機器の取扱説明書をご覧ください。

音声フォーマット

サラウンド（Surround）
ドルビーデジタルやDSPの音声モードなどを用いた臨場感のある音の総称。

ドルビーデジタル（Dolby Digital）
ドルビー社によって開発されたデジタルマルチチャンネル音声規格。モノラルから5.1チャンネルまでに対応しています。プログラム間でセリフの平均レベルを一定に保つダイアログノーマライゼーション、視聴環境の制約に対応してダイナミックレンジを調整するダイナミックレンジ圧縮、スピーカーの数に合わせて出力チャンネル数を最適化するダウンミックスなど数々の機能が採り入れられています。DVD-Videoの標準音声、米国DTVの標準音声として採用されています。

ドルビープロロジックII（Dolby Pro Logic II）
ドルビー社によって開発されたマトリックスタイプのサラウンドデコード技術。ステレオ音源を5.1チャンネルであるかのような立体音場で楽しむことができます。映画の再生に適した「Movie」モード、音楽再生に適した「Music」モード、ゲーム機などに適した「Game」モードがあります。

ドルビーデジタルプラス（Dolby Digital Plus）
ドルビー社が開発した、次世代高精細光ディスク（ブルーレイ、HD DVD）に収録可能な非可逆圧縮の高音質音声フォーマットです。48kHzのサンプリング周波数で、最大7.1チャンネルをサポートします。

ドルビー TrueHD（Dolby TrueHD）
ドルビー社が開発した、次世代高精細光ディスク（ブルーレイ、HD DVD）に収録可能な可逆圧縮の高音質音声フォーマットです。48/96kHzのサンプリング周波数で、最大7.1チャンネル、192kHzのサンプリング周波数で最大5.1チャンネルをサポートします。

DSD（Direct Stream Digital）
スーパーオーディオCDに採用された方式です。100kHzをカバーする再生周波数範囲と可聴帯域内120dB以上のダイナミックレンジが確保できるので、原音に近い音声で録音・再生ができます。

DTSデジタルサラウンド(DTS Digital Surround)
米国のDTS社が開発したデジタルサラウンドフォーマット。コヒレントアコースティックス符号化と呼ばれる算法を使用し、圧縮率は通常4:1程度と比較的低くなっています。映画館ではフィルムにプリントされたタイムコードに同期してCD-ROMに記録された音声が再生されます。

DTS Express
DTS社が開発した最大5.1ch、48kHzのロービットレート音声です。HD DVDのサブオーディオ、ブルーレイディスクのセカンダリーオーディオなどに収録される他、放送コンテンツやメディアサーバーなどの応用が想定されています。

DTS96/24
DTS96/24フォーマットソースに記録された拡張用データを使用して、5.1チャンネル再生するDTSシステム。サンプリング周波数96kHz、量子化ビット数24ビットの高音質で、きめ細やかな音声を再現します。

DTS-HDハイレゾリューションオーディオ（DTS-HD High Resolution Audio）
DTS社が開発した、次世代高精細光ディスク（ブルーレイ、HD DVD）に収録可能な非可逆圧縮の高音質音声フォーマットです。96kHzのサンプリング周波数で、最大7.1チャンネルをサポートします。

DTS-HDマスターオーディオ（DTS-HD Master Audio）
DTS社が開発した、次世代高精細光ディスク（ブルーレイ、HD DVD）に収録可能な可逆圧縮の高音質音声フォーマットです。48/96kHzのサンプリング周波数で、最大7.1チャンネル、192kHzのサンプリング周波数で最大5.1チャンネルをサポートします。

Neo:6
DTS社によって開発された、デジタル・アナログを含むすべての2チャンネルソースを6チャンネルサラウンドにするマトリックスデコード技術。映画に適した「Cinema」モードと音楽に適した「Music」モードが用意されています。また、DTS-ES マトリックスのセンターサラウンドチャンネル信号の抽出にも使用されます。

MPEG-2 AAC
AAC(Advanced Audio Coding)は、AT&T社、ドルビー社、フラウンホーファー・インスティテュート・フォー・インテグレーティド・サーキット（Fraunhofer IIS）、そしてソニー株式会社の4社の高品質マルチチャンネル音声符号化のための最先端技術を組み合わせたもので、ISOとIECの共同管轄の下に、MPEG-2規格の一部として規格化された音声圧縮符号化方式です。
従来のMPEG音声との後方互換性がないので、従来のMPEG音声デコーダーでは再生できません。わが国のデジタルテレビ音声方式として採用されています。

音声

アナログ
一般的な再生機器に装備されているL/R（白/赤）音声出力端子からの音声を、アナログ音声と呼びます。

デジタル
デジタル端子は一般的に、CDプレーヤー、DVDプレーヤーなどに装備されています。
ドルビーデジタルやDTSなどのデジタル音声を聴くときやデジタル録音するときは、デジタル端子と接続しておく必要があります。

光（OPTICAL）デジタル
DVDやCDなどのデジタル信号を入出力するための信号で光ケーブルを使用して接続します。
アナログよりも再生や録音がさらに高品位になります。接続する機器にOPTICAL端子がある場合に使用できます。音質は同軸デジタルと同等です。

同軸（COAXIAL）デジタル
DVDやCDなどのデジタル信号を入出力するための信号で同軸コードを用いて接続します。
アナログよりも再生や録音がさらに高品位になります。接続する機器にCOAXIAL端子がある場合に使用できます。音質は光デジタルと同等です。

サンプリング周波数
アナログ信号をデジタル信号に変換するときの精度。44.1kHzは1秒間に44100回、96kHzは1秒間に96000回アナログ信号を読みとってデジタルに変換します。

ダイナミックレンジ
信号を正しく変換する最大のレベルと、雑音等機器の性質で制限される最小レベルの差。

LFE（Low Frequency Effect）
ドルビーデジタルやDTSの低周波数効果音のこと。一般にディスクなどの信号に入っているとサブウーファーが効果的に働きます。

5.1chサラウンド
視聴位置前方に設置するセンタースピーカー 1つ、フロントスピーカー 2つ、横または後方に設置するサラウンドスピーカー 2つで5ch（チャンネル）、サブウーファーは他のスピーカーよりも再生できる音域が10分の1のため、この6本のスピーカーを使って再生することを5.1chサラウンドと言います。

主な仕様

■ 総合

外形寸法(幅×高さ×奥行き)	1200×399×413mm
質量	45kg

■ AVセンター部

実用最大出力	30W×5(6Ω、1kHz、1ch駆動時、JEITA) 60W(SW)(3Ω、100Hz、JEITA)
定格出力	25W×5(6Ω、1kHz、1ch駆動時、総合ひずみ率0.4%以下、JEITA) 50W(SW)、(3Ω、100Hz、総合ひずみ率0.4%以下、JEITA)
総合ひずみ率	0.4%(1kHz 定格出力時)
ダンピングファクター	70(フロント、8Ω)
入力感度/インピーダンス	150mV/47kΩ(LINE1/LINE2)
周波数特性	10Hz〜100kHz、+1/−3dB(FL/FR LINE1 Direct時) 150Hz〜20kHz、+1/−3dB(FL/FR/C/SL/SR、LINE1、All ch st、Crossover:150Hz時) 20Hz〜150Hz、+1/−3dB(SW、LINE1、All ch st、Crossover:150Hz時)
SN比	105dB(LINE1 Direct時 IHF-A)
スピーカー適応インピーダンス	6Ω〜16Ω(FL/FR/C/SL/SR) 3Ω(SW)
電源・電圧	AC100V(50/60Hz)
消費電力	110W
待機時消費電力	0.2W
HDMI	入力3(IN1/IN2/IN3) 出力1(OUT) 映像解像度 1080p 音声フォーマット Dolby TrueHD、DTS Master Audio、DVD- Audio、DSD インターフェース 3D、Audio Return Channel、Deep Color、x.v. Color、LipSync、CEC
音声入力	デジタル 光:2、同軸:1 アナログ LINE1、LINE2
音声出力	サブウーファープリ 1 スピーカー(C、SL、SR)
その他	音場制御用マイク 1 RI 1

仕様および外観は性能向上のため予告なく変更することがあります。

主な仕様

■ フロントスピーカー部

形式	2ウェイ密閉型
定格インピーダンス	6Ω
最大入力	40W
定格周波数範囲	60Hz〜50kHz
クロスオーバー周波数	9kHz
キャビネット内容積	1.8リットル
使用スピーカー	ウーファー：8cm A-OMFコーン型 ツィーター：2cm バランスドーム
防磁設計	無

■ サブウーファー部

形式	バスレフ型
定格インピーダンス	3Ω
最大入力	50W
定格周波数範囲	35Hz〜200Hz
キャビネット内容積	18リットル
使用スピーカー	13cmコーン型×2
防磁設計	無

仕様および外観は性能向上のため予告なく変更することがあります。

修理について

■ 保証書

この製品には保証書を別途添付していますので、お買い上げの際にお受け取りください。
所定事項の記入および記載内容をご確認いただき、大切に保管してください。
保証期間は、お買い上げ日より1年間です。

■ 調子が悪いときは

意外な操作ミスが故障と思われています。
この取扱説明書をもう一度よくお読みいただき、お調べください。本機以外の原因も考えられます。ご使用の他のオーディオ製品もあわせてお調べください。それでもなお異常のあるときは、電源プラグを抜いて修理を依頼してください。

修理を依頼されるときは、下の事項をお買い上げの販売店、または付属の「オンキヨーご相談窓口・修理窓口のご案内」記載のお近くのオンキヨー修理窓口までお知らせください。

- ▶ お名前
- ▶ お電話番号
- ▶ ご住所
- ▶ 製品名 CB-HT1200
- ▶ できるだけ詳しい故障状況

■ オンキヨー修理窓口について

詳細は付属の「オンキヨーご相談窓口・修理窓口のご案内」をご覧ください。

■ 保証期間中の修理は

万一、故障や異常が生じたときは、商品と保証書をご持参ご提示のうえ、お買い上げの販売店またはお近くのオンキヨー修理窓口へご相談ください。詳細は保証書をご覧ください。

■ 保証期間経過後の修理は

お買い上げ店、またはお近くのオンキヨー修理窓口へご相談ください。修理によって機能が維持できる場合はお客様のご要望により有料修理致します。

■ 補修用性能部品の保有期間について

本機の補修用性能部品は、製造打ち切り後8年間保有しています。性能部品とは、その製品の機能を維持するために必要な部品です。保有期間経過後でも、故障箇所によっては修理可能の場合がありますのでお買い上げ店、またはお近くのオンキヨー修理窓口へご相談ください。

RIHDと互換性のあるテレビやプレーヤー /レコーダーをご使用になるには

RIHDはオンキヨー製品の連動機能の名称です。本製品では、HDMI規格で定められているCEC（Consumer（コンシューマー） Electronics（エレクトロニクス） Control（コントロール））を使用した連動を行うことができます。CECに対応したいろいろな機器と連動することができますが、RIHD対応機器と推奨製品以外での連動は保証いたしません。

■ RIHDと互換性のある機器について

下記の製品がRIHDと互換性があります。(2010年8月現在)最新の情報は、オンキヨーホームページでご確認ください。

テレビ【順不同】

- パナソニック製のビエラリンク対応テレビ
- 東芝製のレグザリンク対応テレビ
- シャープ製のテレビ
- 日立製のWoooリンク対応テレビ
  （対応している機種についての最新の情報は、オンキヨーホームページでご確認ください。）

プレーヤー、レコーダー【順不同】

- オンキヨー製、インテグラ製のRIHD対応プレーヤー
- パナソニック製のビエラリンク対応プレーヤー、レコーダー（パナソニック製のビエラリンク対応テレビと合わせてお使いの場合のみ）
- 東芝製のレグザリンク対応プレーヤー、レコーダー（東芝製のレグザリンク対応テレビと合わせてお使いの場合のみ）
- シャープ製のプレーヤー、レコーダー（シャープ製のテレビと合わせてお使いの場合のみ）
- 日立製のプレーヤー、レコーダー（日立製のWoooリンク対応テレビと合わせてお使いの場合のみ）

※上記以外の機器でもHDMI規格のCECに対応していれば連動する可能性がありますが、動作は保証されません。

ご注意

CB-HT1200にHDMIを介して他のAVセンターを接続しないでください。

■ RIHD接続をするとできる操作

RIHDと互換性のあるテレビの場合

CB-HT1200をRIHDと互換性のあるテレビに接続してお使いになると、下記のリンク操作ができます。

- テレビの電源をスタンバイ状態にするとCB-HT1200もスタンバイ状態に切り換わります。
- テレビのメニュー画面で、音声をCB-HT1200に接続したスピーカーから音を出すか、あるいはテレビのスピーカーから音を出すかを設定できます。
- テレビのアンテナや外部入力の映像・音声もCB-HT1200に接続したスピーカーから音を出すことができます。（HDMIケーブル以外に光デジタルケーブル等の接続が必要です。）
- テレビのリモコンでCB-HT1200のHDMI入力に接続されたCEC対応機器を選択できます。
- テレビのリモコンでCB-HT1200の音量調整やその他の操作ができます。

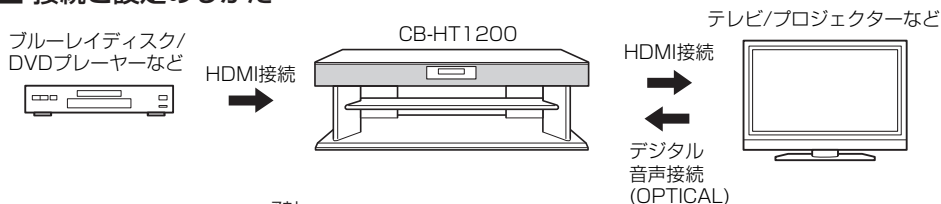
RIHDと互換性のあるプレーヤー /レコーダーの場合

CB-HT1200をRIHDと互換性のあるプレーヤー/レコーダーに接続してお使いになると、下記のリンク操作ができます。

- プレーヤー /レコーダーの再生を開始すると、CB-HT1200の入力がその機器の接続されているHDMI 入力に切り換わります。
- CB-HT1200に付属のリモコンでプレーヤー/ レコーダーの操作ができます。

※お使いの機器によっては、すべての機能が働くわけではありません。

■ 接続と設定のしかた

ブルーレイディスク/
DVDプレーヤーなど
HDMI接続
CB-HT1200
HDMI接続
デジタル
音声接続
(OPTICAL)
テレビ/プロジェクターなど

1. **CB-HT1200のHDMI OUT端子にテレビのHDMI入力を接続する**
2. **テレビからの音声出力を、光デジタルケーブルでCB-HT1200のDIGITAL IN3（OPTICAL）端子に接続する**
   ＊HDMI 1.4対応テレビでARC（オーディオリターンチャンネル）機能をご使用になるときは、この接続は必要ありません。
3. **ブルーレイディスク/DVDプレーヤー（レコーダー）のHDMI出力をCB-HT1200のHDMI IN1端子に接続する**
4. **「HDMI Setup」の設定をそれぞれ「On」にする**

CB-HT1200のRIHDボタンを押して、HDMI Ctrl設定を「On」にします。

- HDMI Ctrl：On
- ARC：Auto
- Power Ctrl：On
- TV Ctrl：On

各設定の詳細説明は（☞48、49ページ）をご覧ください。

5. **設定の確認をする**

① 全ての接続機器の電源を入れます。
② テレビの電源を切り、リンク動作によって接続機器の電源が自動で切れることを確認します。
③ DVDプレーヤー /レコーダーの電源を入れます。
④ DVDプレーヤー /レコーダーを再生して、以下のことを確認します。

- CB-HT1200の電源が自動で入り、DVDプレーヤー /レコーダーを接続している入力が選択される。
- テレビの電源が自動で入り、CB-HT1200を接続している入力が選択される。

⑤ お使いのテレビの取扱説明書をご覧になりながら、テレビのメニュー画面から「テレビのスピーカーの使用」を選び、テレビのスピーカーから音が出てCB-HT1200に接続したスピーカーから音が出ないことを確認します。
⑥ テレビのメニュー画面から、「CB-HT1200に接続したスピーカーの使用」を選び、CB-HT1200に接続したスピーカーから音が出てテレビのスピーカーから音が出ないことを確認します。

ご注意

初めてお使いになるときや、各機器の設定を変えたとき、各機器の主電源をオフにしたとき、コンセントから電源コードを抜いたり停電したときも上記の操作を行ってください。

6. **リモコンで操作します**

操作できるボタンについては25ページをご覧ください。

ご注意

- DVDオーディオ、スーパーオーディオCDの音声はテレビのスピーカーから音声が出ないことがあります。DVDプレーヤーの音声出力設定を2ch PCMに設定すれば、テレビのスピーカーから音を出すことができるようになります。（プレーヤーによっては、できないことがあります。）
- テレビのスピーカーから音を出す操作をしても、CB-HT1200の音量調整や入力の切り換え操作をすると、本機に接続したスピーカーから音が出るようになります。テレビから音を出したいときは、もう一度テレビの操作をやり直してください。
- RIHD対応機器と接続するときは、RIケーブルは接続しないでください。
- テレビの入力を、CB-HT1200が接続されたHDMI端子以外を選ぶと、CB-HT1200の入力は「DIG3（TV）」に切り換わります。
- CB-HT1200は、必要と判断したとき、連動して自動的にパワーオンします。RIHD対応テレビやプレーヤー・レコーダーと接続してお使いの場合でも、必要ないときはCB-HT1200はパワーオンしません。テレビ側の設定で、音声をテレビから出力するように設定していると、連動してパワーオンしないことがあります。
- 組み合わせる機器により、CB-HT1200との連動動作が働かない場合があります。この場合は、CB-HT1200を直接操作してください。
- CB-HT1200のリモコンで、RIHDを利用してプレーヤー /レコーダーの操作ができないときは、その機器がRIHDやCECのリモコン操作に対応していないことが考えられます。

ご購入されたときにご記入ください。
修理を依頼されるときなどに、お役に立ちます。

ご購入年月日：　　　　年　　月　　日

ご購入店名：

Tel.　　　（　　）

メモ：

ONKYO®

オンキヨー株式会社

本社　大阪府寝屋川市日新町2-1　〒572-8540

製品のご使用方法についてのお問い合わせ先：コールセンター

☎050-3161-9555　受付時間　10：00〜18：00

（土·日·祝日·弊社の定める休業日を除きます）

サービスとサポートのご案内：http://www.jp.onkyo.com/support/

G1008-1

SN 29400520